

平安京左京四条一坊四町跡 発掘調査報告書

2 0 2 5

株式会社 文化財サービス

例 言

- 1 本書は、京都市中京区壬生御所ノ内町 29 番 3・4 で実施した、平安京左京四条一坊四町跡の発掘調査成果報告書である。（京都市番号 24H329）
- 2 調査は、集合住宅建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、井上製材有限公司より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、望月麻佑、菅田 薫、松林茉侑（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和 7 年 5 月 12 日～7 月 4 日である。
- 5 調査面積は 138.6 m²である。
- 6 本文・図中で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「壬生」「島原」を参考にし、作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は「ジオイド 2024 日本とその周辺」平面直角座標系 VI 系による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 8 土層名及び出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 遺構番号は通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、建物・柱列・石列は別に番号を付した。
- 10 本書の執筆は望月が行い、編集は望月、興梠千春（文化財サービス）が行った。
- 11 現地での記録写真撮影は望月が行い、出土遺物の撮影は写房楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 12 現地での重機掘削は株式会社一誠建設に委託した。
- 13 調査に係る資機材のリース及び仮設工事は株式会社 Soid に委託した。
- 14 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 15 発掘調査及び整理事業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 高橋 潔、田中慎一、小林一浩、上田智也、吉岡創平、清須慶太（以上、文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理事業〕 高橋 潔、松林茉侑、興梠千春、吉川絵里、中 優作、野地ますみ、神野いくみ、甲田春奈、西尾知子、下市沙耶香、溝川珠樹、内牧明彦（以上、文化財サービス）
- 16 自然科学分析（樹種同定）については、一般社団法人文化財科学研究センターに依頼した。
- 17 出土遺物の年代観は、下記の文献に依った。

赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（2－1）」『京都市文化財保護課研究紀要』第 4 号 2021 年

赤松佳奈「京都出土中国産陶磁器の形・質・割合とその背景（2－2）」『京都市文化財保護課研究紀要』第 6 号 2023 年

相賀徹夫『世界陶磁全集 18 高麗』株式会社小学館 1978 年
柏田由香・上村和直『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』
2017-16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018 年
小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』真陽社 2005 年
近藤奈央・上村和直・松吉祐希『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・
岡崎遺跡』2015-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016 年
日本中世土器研究会『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022 年
平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要』第 12 号 公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所 2019 年

- 18 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。
(敬称略)

木許 守 (龍谷大学)、赤松佳奈・鈴木久史 (京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財
保護課)、鈴木久男 (京都産業大学)、尾野善裕 (京都国立博物館)

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	5

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境	6
2 既往の調査	8

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序	14
2 検出遺構	14
(1) 第1面	17
(2) 第2面	19
(3) 第3面	25
(4) 第4面	32
3 出土遺物	36
(1) 第4面	36
(2) 第3層・第3層直上	37
(3) 第3面	37
(4) 第2層・第2層直上	42
(5) 第2面	43
(6) 第1層	45
(7) 第1面	47

第Ⅳ章 まとめ

1 遺構の変遷	49
(1) 平安時代末期から鎌倉時代初頭	49
(2) 安土・桃山時代以降	53
2 平安時代末期から鎌倉時代初頭における邸宅の所有者について	54

図版目次

図版 1	遺構	1. 西区	第1面遺構掘削後（東から）
		2. 西区	第1面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
図版 2	遺構	1. 東区	第1面遺構掘削後（東から）
		2. 東区	第1面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
図版 3	遺構	1. 西区	第2面遺構検出後（東から）
		2. 西区	第2面遺構検出後 垂直写真（上が北）
図版 4	遺構	1. 西区	第2面遺構掘削後（東から）
		2. 西区	第2面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
図版 5	遺構	1. 東区	第2面遺構掘削後（東から）
		2. 東区	第2面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
図版 6	遺構	1. 西区	建物1 柱穴025 地下式礎石検出状況（南から）
		2. 東区	建物1 柱穴090 地下式礎石検出状況（北から）
		3. 東区	建物1 柱穴091 南北断面（西から）
		4. 東区	建物1 柱穴080 南北断面（西から）
		5. 東区	建物1 柱穴078 東西断面（北から）
		6. 東区	建物1 柱穴081 掘削後（南から）
		7. 東区	建物1 柱穴082 掘削後（南から）
		8. 東区	建物1 柱穴083 掘削後（南から）
図版 7	遺構	1. 西区	地業016・礎盤石017・瓦列018 検出状況（北から）
		2. 西区	地業016・礎盤石017・瓦列018 検出状況（南から）
図版 8	遺構	1. 西区	地業016 検出状況（西から）
		2. 西区	瓦列018 検出状況（西から）
		3. 西区	礎盤石017 検出状況（南から）
図版 9	遺構	1. 西区	第3面遺構掘削後（東から）
		2. 西区	第3面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
図版 10	遺構	1. 東区	第3面遺構検出後（東から）
		2. 東区	第3面遺構検出後 垂直写真（上が北）
図版 11	遺構	1. 東区	第3面遺構掘削後（東から）
		2. 東区	第3面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
図版 12	遺構	1. 東区	地業100・瓦列101・石敷113 検出状況（北から）
		2. 東区	柱列2・3、溝116 掘削後（南から）
図版 13	遺構	1. 東区	柱列2 柱穴107 東西断面（南から）
		2. 東区	柱列2 柱穴106 東西断面（南から）
		3. 東区	柱列2 柱穴104 東西断面（南から）
		4. 東区	柱列2 柱穴103 東西断面（南から）
		5. 東区	柱列3 柱穴111 東西断面（南から）

- 6. 東区 柱列3 柱穴110 東西断面（南から）
- 7. 東区 柱列3 柱穴109 東西断面（南から）
- 8. 東区 溝116 南北断面（西から）
- 図版 14 遺構
 - 1. 西区 柱列1 掘削後（西から）
 - 2. 西区 柱列1 柱穴043 東西断面（南から）
 - 3. 西区 柱列1 柱穴044 東西断面（南から）
 - 4. 西区 柱列1 柱穴045 東西断面（南から）
 - 5. 西区 柱列1 柱穴046 東西断面（南から）
- 図版 15 遺構
 - 1. 西区 土坑030・037 掘削後（南から）
 - 2. 西区 土坑037 東播系須恵器検出状況（南から）
 - 3. 西区 土坑035 掘削後（南から）
- 図版 16 遺構
 - 1. 東区 第4面遺構掘削後（東から）
 - 2. 東区 第4面遺構掘削後 垂直写真（上が北）
- 図版 17 遺構
 - 1. 東区 柱列4 掘削後 垂直写真（上が北）
 - 2. 東区 井戸133・溝136 掘削後（北から）
 - 3. 東区 柱列4 柱穴128 東西断面（南から）
 - 4. 東区 柱列4 柱穴127 東西断面（南から）
 - 5. 東区 柱列4 柱穴125 東西断面（南から）
 - 6. 東区 溝136 東西断面（北から）
- 図版 18 遺構
 - 1. 東区 井戸133 曲物検出状況（西から）
 - 2. 東区 井戸133 曲物内掘削後（西から）
 - 3. 東区 井戸133 掘方南北断割後（西から）
- 図版 19 遺物
 - 1. 井戸133・溝136・柱穴149 出土遺物（土器・瓦）
 - 2. 第3層・第3層直上 出土遺物（土器）
- 図版 20 遺物
 - 1. 石敷114 出土遺物1（土器）
 - 2. 石敷114 出土遺物2（瓦）
 - 3. 瓦列101 出土遺物1（瓦）
 - 4. 瓦列101 出土遺物2（瓦）
- 図版21 遺物
 - 1. 柱列2・3 出土遺物（土器・瓦）
 - 2. 溝116 出土遺物（土器）
- 図版22 遺物
 - 1. 土坑035 出土遺物（土器）
 - 2. 土坑037 出土遺物（土器）
- 図版23 遺物
 - 1. 第2層・第2層直上 出土遺物（土器・瓦）
 - 2. 建物1 出土遺物（土器・瓦）
- 図版24 遺物
 - 1. 土坑076 出土遺物（土器）
 - 2. 地業016・瓦列018 出土遺物（瓦）
- 図版25 遺物
 - 1. 第1層 出土遺物1（土器・土製品・瓦）
 - 2. 第1層 出土遺物2（明代青磁 壺）
 - 3. 第1層 出土遺物3（高麗青磁 承盤）
 - 4. 土坑064 出土遺物（土器）

挿図目次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査経過写真	2
図3	調査区割・基準点配置図（1：150）	4
図4	平安京条坊図（1：80,000）	6
図5	平安京内の地形分類図（1：80,000）	6
図6	既往調査位置図（1：5,000）	9
図7	調査区北壁断面図（1：60）	15
図8	調査区東壁・西壁・拡張部南壁断面図（1：60）	16
図9	第1面調査区全体平面図（1：100）	18
図10	石列1平・断面図（1：40）	19
図11	第2面調査区全体平面図（1：100）	20
図12	建物1・溝022平面図（1：60）	22
図13	建物1・溝022断面図、土坑076平・断面図（1：20、1：60）	23
図14	地業016・瓦列018・礎盤石017平・断面図（1：40）	24
図15	第3面調査区全体平面図（1：100）	26
図16	地業100、瓦列101、石敷113・114、溝116平・断面図（1：40）	27
図17	柱列2・3・4平・断面図（1：40）	29
図18	柱列1・土坑035・溝057平・断面図（1：40）	31
図19	土坑030・037平・断面図（1：20）	32
図20	第4面調査区全体平面図（1：100）	33
図21	井戸133・溝136・柱穴149平・断・立面図（1：40）	34
図22	井戸133 横棧	35
図23	出土遺物1（1：4）	38
図24	出土遺物2（1：4）	40
図25	出土遺物3（1：4）	41
図26	出土遺物4（1：4、1：8）	44
図27	出土遺物5（1：4）	46
図28	出土遺物6（1：4）	47
図29	平安時代末期～鎌倉時代初頭遺構変遷図（1：250）	51
図30	左京四条一坊四町内の調査（1：800）	52

表目次

表1	既往調査一覧表	11
表2	遺構概要表	17
表3	遺物概要表	36
表4	遺物観察表	55

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至る経緯（図1）

本調査は集合住宅建設工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は京都市中京区壬生御所ノ内町29番3・4に所在し、平安京左京四条一坊四町跡に該当する。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が行われた。その結果、遺構の存在が確認されたことから、開発原因者である井上製材有限会社に対し発掘調査の指導が行われた。調査は、開発原因者から文化財サービスが委託を受けて実施することになった。

2 調査の経過（図2）

発掘調査は、2025年5月12日から現地作業を行った。調査区は、文化財保護課の指導により、東西22.0m、東辺南北6.0m、西辺南北8.0m、面積134.0㎡を設定した。掘削残土の仮置き場を確保するため、調査区は東区と西区に二分割し、西区より調査に着手した。

5月12日より準備工を行い、5月13日より西区の重機掘削を開始した。近現代盛土及び近世耕作土を重機掘削で除去したところ、暗灰黄色泥砂～黄褐色砂礫を呈する遺物包含層を確認した。その後人力によって当該層上面の精査を行ったところ、安土・桃山時代以降の素掘り溝を検出した。この面を第1面として、遺構掘削、写真撮影や測量作業などの記録作業後、第1面の遺構を成立させる当該層を第1層として掘り下げを行った。その結果、西区西側では灰色シルトを呈する湿地状堆積、東側では暗灰黄色砂礫層を検出し、その上面にて平安時代末期から鎌倉時代初頭に属する小礫や瓦片を敷いた地業跡や礎盤石、柱穴などを確認した。この面を第2面とし、当該面の検出状況及び遺構掘削後の記録作業を行った後、第2面の遺構を成立させる当該層を第2層として、遺跡基盤層である褐灰色砂礫層まで掘り下げを行った。基盤層上面を第3面として精査を行った結果、平安時代末期から鎌倉時代初頭の柱穴や土坑などを確認した。第3面に属する遺構の掘削、記

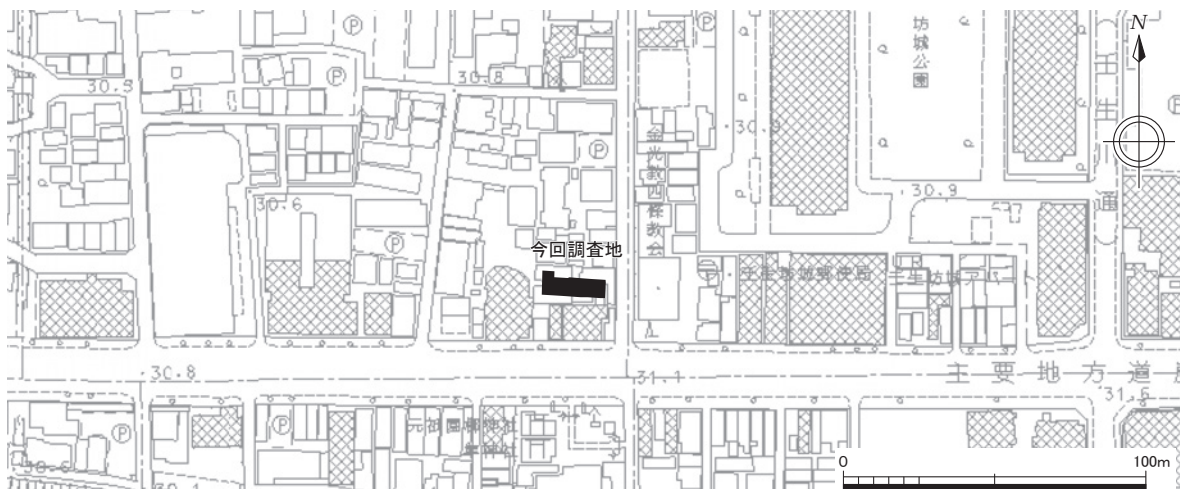


図1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査区設定（南西から）



2. 西区重機掘削作業（北西から）



3. 西区地業016掘削作業（南西から）



4. 西区埋戻し作業（南西から）



5. 東区重機掘削作業（南東から）



6. 東区井戸133掘削作業（南西から）



7. 東区埋戻し作業（南東から）



8. 調査完了後（南西から）

図2 調査経過写真

録作業を実施した後、補足調査として調査区南西隅の拡張作業を行った。6月2日に西区調査を終了し、重機による反転作業を実施した。6月4日より東区調査に着手し、西区と同様に近現代盛土及び近世耕作土を重機掘削で除去したところ、暗灰黄色～黄灰色泥砂層の上面に安土・桃山時代以降の素掘り溝や土坑、束石群を検出した。この面を第1面として遺構を調査した後、当該層を第1層として掘り下げを行った。その結果、暗灰黄色砂礫～黄灰色シルト層の上面にて平安時代末期から鎌倉時代初頭の建物や土坑などを検出した。この面を第2面として遺構掘削及び記録作業を実施し、第2面の遺構を成立させる層を第2層として掘り下げを行ったところ、東区東側にて灰色シルトを呈する湿地状堆積上に平安時代末期から鎌倉時代初頭に属する小礫や瓦を敷いた地業跡や柱列、四条大路北築地内溝などを検出した。この面を第3面とし、当該面の検出状況及び遺構掘削後の記録作業を行った後、当該層を第3層として遺跡基盤層である褐灰色砂礫～灰色細砂層まで掘り下げを行った。その結果、平安時代末期に属する井戸や柱穴などを検出した。この面を第4面として遺構掘削、記録作業を実施した後、下層確認作業を行った。7月3日に東区の埋戻し作業を行い、7月4日に全ての工程を完了した。調査区拡張に伴い、最終的な調査面積は138.6㎡となった。

なお、現地調査における記録作業として、写真撮影の機材は、35mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。

調査の過程においては、適宜、文化財保護課の検査及び指導を受けた。また、文化財保護課が指定した本調査の検証審査員である木許 守氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

3 測量基準点の設置と地区割り（図3）

測量基準点は、街区基準点である6C206・6C207を用いて、TS測量により調査地敷地内にP.1～P.5を設置した。測量成果は以下の通りである。なお、標高は測地成果2011を「ジオイド2024日本とその周辺」で補正し、測地成果2024で示している。

6C206	X = -110,504.247 m	Y = -23,327.711 m	H = 30.629 m
6C207	X = -110,505.087 m	Y = -23,237.070 m	H = 30.880 m
P.1	X = -110,483.358 m	Y = -23,333.088 m	H = 30.534 m
P.2	X = -110,478.991 m	Y = -23,359.667 m	H = 30.234 m
P.3	X = -110,486.694 m	Y = -23,349.533 m	H = 30.205 m
P.4	X = -110,481.393 m	Y = -23,337.610 m	H = 30.500 m
P.5	X = -110,487.291 m	Y = -23,349.096 m	H = 30.245 m

検出遺構及び出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。

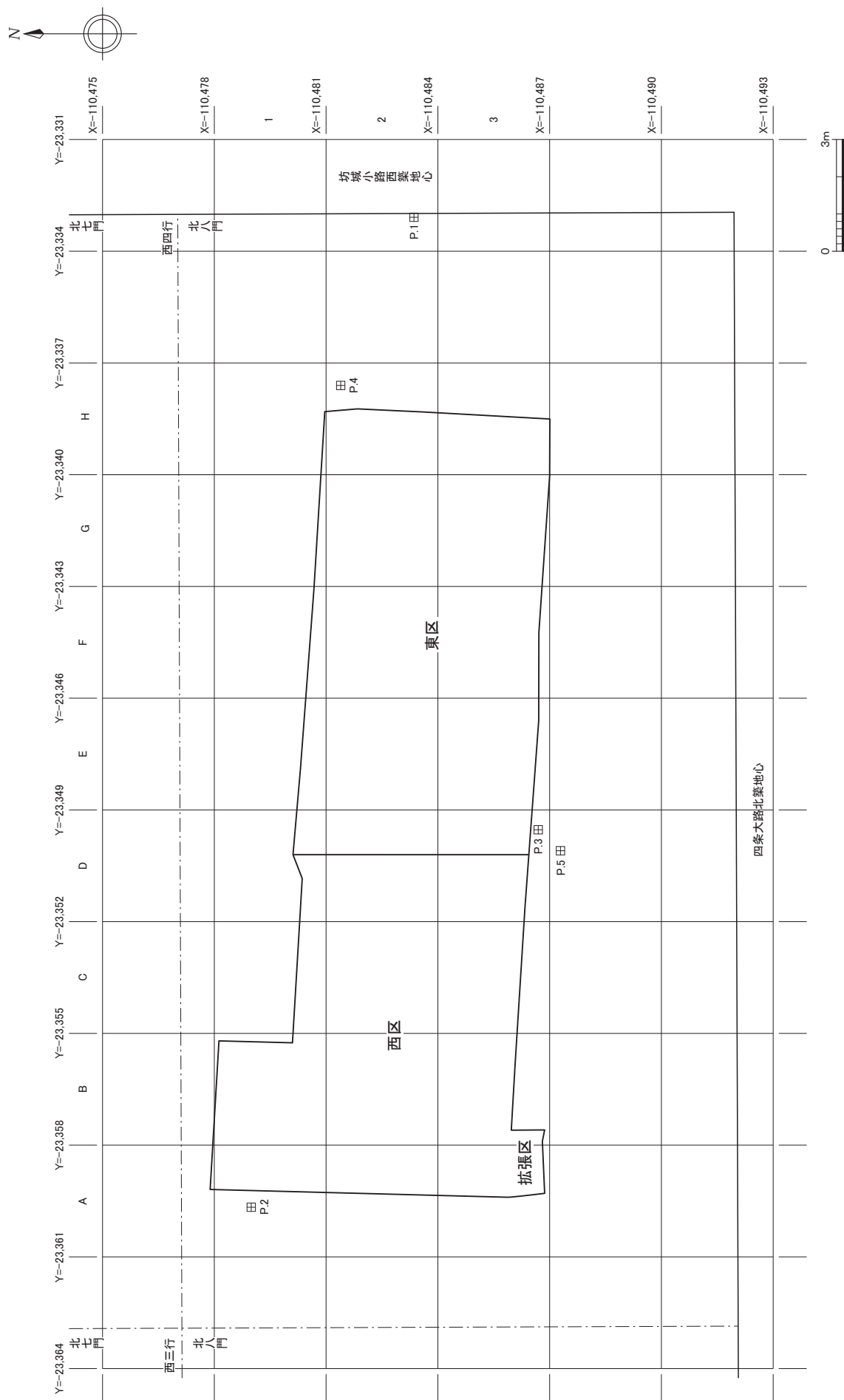


图3 調査区劃・基準点配置図 (1 : 150)

4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業及び報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した望月、編集作業は興杢が担当し、その他の整理作業は当社社員が分担して行った。

第Ⅱ章 位置と環境

1 位置と環境（図4・5）

調査地は四条通と坊城通の交差点北西側に位置する。平安京の条坊では、左京四条一坊四町の南東隅にあたり、四行八門制では西四行北八門に該当する。調査区東端より5.3m東が坊城小路西築地心、調査区南端より5.0m南が四条大路北築地心の推定位置となる。朱雀大路に面する左京・右京一坊では、都城の景観を保つために築垣（坊城）が整備されていたと考えられている。

当地は京都盆地北部のほぼ中央に位置する。平安京内の地形は鴨川や紙屋川、その他小河川によって形成された扇状地が重なり合った複合扇状地から成り立っており、調査地は鴨川扇状地と紙屋川扇状地の間に形成された谷地形に隣接する紙屋川扇状地の扇端部上に立地する。このことから、当地一帯では湧水が豊富な湿地状堆積が分布する。

平安時代中期に編纂された九条家本『延喜式』左京図によると、左京四条一坊四町は空白地帯となっているが、鎌倉時代に成立した『拾芥抄』東京図では「源国信」との記載があり、当町にて11世紀末から12世紀初頭の公卿である源中納言、村上源氏源国信の邸宅が存在していたことが窺える。国信は「坊城中納言」と号していたと知られており⁽¹⁾、邸宅の東側を通る坊城小路に由来するものと推測される。また、源国信は左京五条三坊十五町にも邸宅を構えていたが⁽²⁾、鎌倉時代初頭には既に小規模な宅地として分譲されていたことが判明している⁽³⁾。

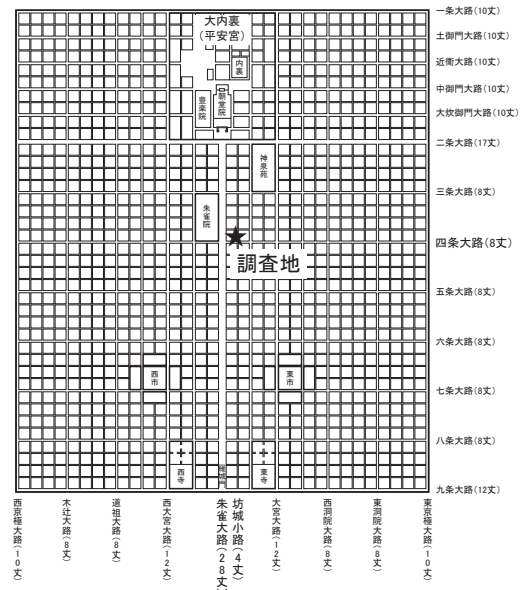


図4 平安京条坊図（1：80,000）

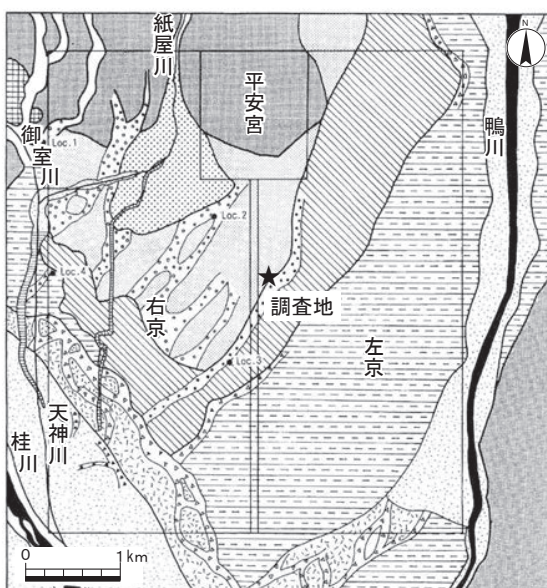
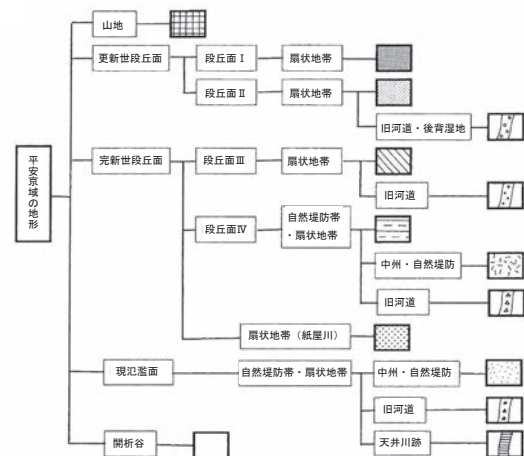


図5 平安京内の地形分類図（1：80,000）

凡例



※河角論文（2001）を一部改変

左京四条一坊では他の町においても平安時代の貴族邸宅が知られている。二町には11世紀に散位従四位下大江公仲邸があったが、嘉保二（1095）年に罪を問われて配流となり、12世紀前半には左大弁藤原為隆の邸宅地となっている。五町には平安時代前期の光孝天皇皇子である是忠親王の御所、「南院」が存在したとされる。是忠親王はその居所の名称に由来し、南院親王とも呼称される⁽⁴⁾。六町には平安時代後期の内蔵頭藤原国明邸が所在する。八町においては貞観元（859）年に右大臣藤原良相が勸学院付属の医療施設である「延命院」を創設している。九・十・十五・十六町は『拾芥抄』東京図にて「後院」と記されており、平安時代中期に円融天皇離宮である四条後院が所在したことが窺える。十五・十六町ではもとより太政大臣藤原頼忠の四条坊門大宮第が存在したが、円融天皇にこの邸宅を献上している⁽⁵⁾。十二町では12世紀後半に菅原貞衡の邸宅が存在していたが、応保元（1161）年に焼亡したと伝えられる⁽⁶⁾。十三町においては平安時代後期中納言藤原家成邸が存在し、その後権大納言中宮大夫藤原隆季邸⁽⁷⁾となったが、安元三（1177）年の「太郎焼亡」によって焼失している。十四町には平安時代後期の大納言である藤原師信の邸宅があった⁽⁸⁾が、承保四（1077）年に焼亡したとされる⁽⁹⁾。発掘調査成果からも、平安時代後期より当町周辺での土地利用が活発化することが立証されている。

調査地の南西部には正暦二（991）年、快賢僧都によって開山された律宗寺院である壬生寺が所在する。延命地藏菩薩を本尊とし、地藏信仰が篤く、当時より地域の信仰の中心となってきた。室町時代後期の官吏であった壬生晴富の日記『晴富宿禰記』によると、文明十（1478）年一月十四日条にて「自今朝壬生構壊之」との記述があり、壬生寺の周囲には「壬生構」と呼ばれる防御用の濠が設けられていたことがわかる。周辺の発掘調査においても壬生構に相当すると考えられる室町時代後期の大型溝が検出されており、壬生寺周辺に建立された本隆寺・立本寺などの法華寺院が比叡山延暦寺と対立を深め、城塞化した様相を示している。

中世以後、当地周辺は農地化が進んでゆき、江戸時代になると葛野郡壬生村に編成される。天明七（1787）年に成立した『拾遺都名所図会』では、壬生村で「壬生菜」が栽培されている様子が描かれている。

大正元（1912）年には京都市電千本線が開業し、千本三条から四条大宮を斜めに通る後院通が開通された。これ以降、当地周辺は急速に宅地化が進み、現在に至る市街地的景観の原型が形成されてゆく。

註

- (1) 『尊卑分脈』による。
- (2) 東洞院に所在していた源国信邸は綾小路東洞院（『中右記』天仁元年正月一日条）とも五条坊門東洞院（『中右記』康和四年一一月一七日条）とも記述が残されているが、佐々木英夫氏の研究より五条四坊二町には高階泰仲邸があったと推定されることから、源国信邸は左京五条三坊十五町に位置していたと考えられている。
- (3) 『鎌倉遺文』五七三号にて、建久二（1191）年に橘氏女が当町の東半部にあった私領を藤四郎入道念性に分譲する旨が認められる。

- (4)『日本紀略』延喜二十(920)年閏六月九日条
- (5)『日本紀略』天元四(981)年七月七日程及び同年九月十三日程
- (6)『山槐記』応保元(1161)年十二月一九日程
- (7)『山槐記』安元元(1175)年八月一六日程
- (8)『中右記』寛治六(1092)年四月二十八日程及び同七(1093)年十月二十七日程
- (9)『水左記』承保閏十二月八日程

参考文献

河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年
下中邦彦『史料 京都の歴史』第9巻 平凡社 1985年
下中邦彦『京都市の地名』日本歴史地名体系第二七巻 平凡社 1979年
新田和央『平安京左京四条一坊五町跡』京都市文化財保護課発掘調査報告2023-1 京都市文化財保護課
2024年
村尾政人『平安京跡(左京四条一坊四町)発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書3
西近畿文化財調査研究所 2001年
吉村正親「平安京坊城地について」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第6号 財団法人京都市埋蔵文化財
研究所 2000年

2 既往の調査(図6、表1)

調査地周辺では、左京四条一坊を北西から南東に走る後院通の南西側を中心に多数の調査が実施されている。特に、当該地の西半は朱雀大路に面する「坊城」エリアに属することから、平安時代初めより条坊が整備されてきた。また、湧水が豊富な湿地状堆積が分布する地域であるため、平安時代から鎌倉時代にわたって苑池の造営が盛んに行われた。

平安時代前・中期における調査地周辺の様相として、「坊城」に該当する四条一坊一町から四町を中心に遺構が確認されている。四条一坊一町では、平安時代初頭にて六角小路北側溝・築地内溝・南築地地下暗渠など六角小路に関する条坊関連遺構がつくられるが、9世紀中頃になるとそれらは埋め立てられ、州浜・導水施設を伴う池が造成されている。池の埋土からは「朱雀院」と記された題箋が出土しており、朱雀大路を挟んだ右京四条一坊一町から八町を占めていたとされる朱雀院の存在を窺わせる。平安時代中期までに池は廃絶し、平安時代後期になると六角小路が再びつくられている(3)。四条一坊二町においては、平安時代初頭において宅地造成のために自然地形を埋める大規模な整地が行われた痕跡が確認された。平安時代前期から中期前半には建物・井戸など宅地遺構が認められるほか、宅地排水施設も検出されている。井戸からは「なにはつ」の歌が墨書された木簡が出土した(10)。また、平安時代前・中期の四条坊門小路北側溝も認められている(12)。四条一坊三町においては、平安時代前期の州浜を伴う苑池遺構(15)や、平安時代中期に属する建物・礎石列・柱列などの宅地関連遺構(13)、平安時代中期以前の坊城小路西築地内溝(16)が検出されている。四条一坊六町では平安時代前期の井戸(25)、四条一坊十三町では平



図6 既往調査位置図（1：5,000）

安時代前・中期の池状遺構が見つかった（45・46）。池状遺構は中島状につくり出されており、部分的に平瓦が敷かれていた。平安時代後期になると規模を縮小して改修される（45）。五条一坊二町では、平安時代前期の朱雀大路路面・東側溝・東築地内溝が確認された。東側溝の埋土より斎串などの祭祀遺物が多量に出土しており、その中に蘇民将来札も認められる（58）。

平安時代後期から鎌倉時代前半において、左京四条一坊では宅地利用が活発化し、遺構・遺物が急増する。四条一坊二町では平安時代後期に庭園遺構や礎石建物などがつくられ、庭園遺構は3回の作り替えが認められた。大江公仲の邸宅或いは藤原為隆の「坊城堂」と推測される（10）。四条一坊三町では平安時代後期の坊城小路西築地内溝（13）や錦小路北側溝（15）が確認され、磁州窯

系の陶器片が出土している（13）。四条一坊五町においては、平安時代後期から鎌倉時代に属する壬生大路西築地内溝（26）、坊城小路路面・東側溝・東築地（27）、錦小路南側溝（30）の他、柱列・井戸などの宅地関連遺構が検出されている。四条一坊六・七町では平安時代後期の建物や井戸などの宅地遺構が認められており、井戸からは「寛治五（1091）年」と記された墨書土器が出土した（25）。その他、平安時代後期から鎌倉時代の四条坊門小路路面・北側溝が確認されている（33）。四条一坊十一町では平安時代後期から鎌倉時代の櫛笥小路東側溝（9）、四条一坊十三町では平安時代後期の池状遺構や建物・井戸・区画溝などの宅地関連遺構（45・46）、壬生大路東側溝（9）が検出されている。

室町時代になると四条大宮周辺に法華寺院が進出し、左京四条・五条一坊の東半を中心に遺構が認められるようになる。四条一坊十二・十三町、五条一坊九町では法華寺院の構えと想定される大型溝が検出されている（41・46・64）ほか、四条一坊五・六・十三・十四町、五条一坊九・十・十五町にて室町時代の宅地関連遺構が確認されている（25・31・41・45・46・49・51・64・67）。

今回の調査地である左京四条一坊四町内においては発掘調査が2件、試掘・立会調査が5件実施されている。調査地の西隣で行われた発掘調査（18）では、平安時代前期の井戸や平安時代後期の四条大路北側溝及び北築地内溝が検出されている。四条大路北築地内溝の埋没後に成立した平安時代後期の土坑より多量の土製鋳型片が出土しており、その内に磁州窯の陶器片も含まれていた。19の発掘調査においても、平安時代前期の井戸、平安時代後期の四条大路北側溝・北築地内溝とともに朱雀大路東築地内溝及び築垣状遺構が確認されている。朱雀大路東築地内溝と四条大路北築地内溝は直角に接続しており、四条大路北側溝と北築地内溝の間には南北に繋ぐ石組の暗渠が検出された。調査地の南隣で行われた立会調査（24）では、横板と杭を組み合わせた木組遺構が認められており、宅地から四条大路北側溝に排水する暗渠の可能性が考えられている。当地より約100m北西側で実施された立会調査（23）では、平安時代後期から鎌倉時代に属する州浜を伴う池が確認されており、平安時代後期から鎌倉時代において当町は邸宅地として土地利用が盛んであったことが推測される。

表 1 既往調査一覧表

No.	調査位置	調査法	調査成果概要								掲載文献
			平安・前	平安・中	平安・後	鎌倉	室町	安土・桃山	江戸	時期不明	
1	左京四条一坊一町、六角小路	発掘	建物・溝・井戸・土坑・池								『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧 1981』埋文研 1982 年
2	左京四条一坊一町	発掘	池			溝					『3 平安京左京四条一坊』『昭和 62 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991 年
3	左京四条一坊一町、六角小路	発掘	初頭：六角小路北側溝・宅地内溝・南築地地下暗渠・排水溝 初期～中期：池・井戸		六角小路南北側溝・築地・宅地内溝・井戸						『7 平安京左京四条一坊』『平成 4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1995 年
4	左京四条一坊一町、朱雀大路	発掘			朱雀大路東側溝				溝・土坑		『平安京左京四条一坊一町一壬生朱雀町の調査一』古代文化調査会 2020 年
5	左京四条一坊一町	試掘	湿地状堆積								『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』文化観光局 1989 年
6	左京四条一坊一町	試掘	堤状遺構を伴う池			井戸					『Ⅲ-2 平安京左京四条一坊一町跡 No.4』『京都市内遺跡試掘調査報告平成 20 年度』文化市民局 2009 年
7	左京四条一坊一町	立会	土坑			包含層			包含層		『京都市内遺跡立会調査概報平成 12 年度』文化市民局 2001 年
8	左京四条一坊一町、三条大路	立会	湿地状堆積								『2 平安京左京四条一坊一町(05HL83・100・109)』『京都市内遺跡立会調査概報 平成 17 年度』文化市民局 2006 年
9	左京四条一坊一・七・十一・十三町、朱雀大路・六角小路・壬生大路・四条坊門小路・錦小路・櫛笥小路	発掘			壬生大路東側溝 櫛笥小路東側溝		溝・湿地状堆積		井戸・溝・土坑・落込み		『平安京左京四条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-1 埋文研 2021 年
10	左京四条一坊二町	発掘	建物・溝・水場・井戸・土坑・ピット・落込み	溝・井戸・枳状遺構	礎石建物・タタキ・池・溝・築地・櫓・集石・列石・土坑・土器溜り						『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-10 埋文研 2015 年
11	左京四条一坊二町	立会		湿地状堆積						湿地状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 60 年度』文化観光局 1986 年
12	左京四条一坊二・七・十・十五町、四条坊門小路	立会	四条坊門小路北側溝								『4 左京四条一坊』『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1984 年
13	左京四条一坊三町	発掘		建物・柱列・礎石列	坊城小路西築地内溝・柱穴						『平安京左京四条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2022-3 埋文研 2022 年
14	左京四条一坊三町	試掘	中期以前：湿地状堆積 中期以降：橋脚遺構？								『Ⅲ-1 平安京左京四条一坊三町跡 No.12』『京都市内遺跡試掘調査報告平成 6 年度』文化観光局 1994 年
15	左京四条一坊三町、錦小路	試掘	苑池遺構		錦小路北側溝						『Ⅲ-1 平安京左京四条一坊三町跡 No.24』『京都市内遺跡試掘調査報告平成 15 年度』文化観光局 2004 年
16	左京四条一坊三町	試掘	中期以前：坊城小路西築地内溝・ピット 中期以降：坊城小路西築地内溝								『Ⅲ-1 平安京左京四条一坊三町跡 No.42 (20H249)』『京都市内遺跡試掘調査報告令和 2 年度』文化市民局 2021 年
17	左京四条一坊三町	立会			土坑・包含層						『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 58 年度』文化観光局 1984 年
18	左京四条一坊四町、四条大路	発掘	井戸		四条大路北側溝・北築地内溝・井戸・土坑(工房跡?)						『Ⅱ 左京四条一坊』『平安京跡発掘調査概報昭和 58 年度』文化観光局 1983 年
19	左京四条一坊四町、朱雀大路・四条大路	発掘	井戸		朱雀大路東築地内溝・築垣状遺構・南北溝・四条大路北側溝・北築地及び内溝・築地下石組暗渠	溝・土坑・ピット					『平安京跡(左京四条一坊四町)発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書 3 西近畿文化財調査研究所 2001 年

No.	調査位置	調査法	調査成果概要							掲載文献
			平安・前	平安・中	平安・後	鎌倉	室町	安土・桃山	江戸	
20	左京四条一坊四町	立会		包含層						『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和56年度』文化観光局 1982年
21	左京四条一坊四町	立会	包含層							『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』文化観光局 1992年
22	左京四条一坊四町	立会			湿地状堆積					『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』文化市民局 1997年
23	左京四条一坊四町	立会			苑池遺構					「1 平安京左京四条一坊四町(05HL167)」『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』文化市民局 2006年
24	左京四条一坊四町、 四条大路	立会			湿地状堆積・ 木組遺構					「3 平安京左京四条一坊四町(06HL482)」『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』文化市民局 2008年
25	左京四条一坊五・六・七町、 壬生大路・錦小路・ 四条坊門小路	発掘	井戸・土坑		井戸・ 掘立柱建物・ 土坑	四条坊門小路 南北側溝、 掘立柱建物・ 井戸・土坑				『平安京跡発掘調査報告 一左京四条一坊一』平安京調査会 1975年
26	左京四条一坊五町、 壬生大路	発掘	土坑		井戸・土坑	壬生大路 西築地内 溝、柱穴 列・土坑・ 整地層	土坑		土坑・ 土取り穴	『平安京左京四条一坊五町跡』京都市文化財保護課発掘調査報告 2023-1 文化市民局 2024年
27	左京四条一坊五町、 坊城小路	発掘	流れ堆積 (湿地状堆積)	土坑	坊城小路 路面・ 東側溝・ 東築地、 土坑・柱列	溝				『平安京左京四条一坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2024-6 埋文研 2025年
28	左京四条一坊五町、 四条大路	試掘	東西溝							『京都市内遺跡試掘調査報告 平成3年度』文化市民局 1992年
29	左京四条一坊五町、 四条大路	立会			土坑・ 包含層				包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
30	左京四条一坊五町、 錦小路	立会			錦小路南側溝					『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
31	左京四条一坊六・ 十一町、壬生大路	発掘				溝・土坑・ 井戸	耕作溝・ 土坑・柱穴		井戸	「2. 平成21・22年度平安京跡左京四条一坊六・十一町、壬生大路発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第142冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2011年
32	左京四条一坊六町	試掘		包含層					井戸・ 土坑	『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和56年度』文化観光局 1982年
33	左京四条一坊六町、 四条坊門小路	試掘			四条坊門小路路面・ 南側溝					『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
34	左京四条一坊六町	立会		包含層、 下層に 湿地状堆積						『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』文化観光局 1983年
35	左京四条一坊六町	立会	包含層							『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
36	左京四条一坊六町	立会		包含層、 下層に 湿地状堆積						『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
37	左京四条一坊七町	立会			土坑・包含層					『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
38	左京四条一坊七町	立会			土坑					『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』文化観光局 1986年
39	左京四条一坊九町	立会				土坑				『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』文化観光局 1984年
40	左京四条一坊十一町	立会			土坑					『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』文化観光局 1985年
41	左京四条一坊十二・ 十三町、櫛笥小路	発掘	湿地状堆積				堀・溝・ 土坑・ ビット・ 土取穴			『平安京左京四条一坊十二・十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-33 埋文研 2007年
42	左京四条一坊 十二町、四条大路	試掘					包含層		四条大路 北側溝	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成28年度』文化市民局 2017年

No.	調査位置	調査法	調査成果概要								掲載文献
			平安・前	平安・中	平安・後	鎌倉	室町	安土・桃山	江戸	時期不明	
43	左京四条一坊十二町	立会	井戸								『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』文化観光局 1990 年
44	左京四条一坊十二町、四条大路	立会	平安中期：ビット 平安末期～鎌倉：土坑 平安～室町：東西溝							落込	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化市民局 1998 年
45	左京四条一坊十三町、櫛笥小路	発掘	池状遺構	池状遺構・井戸・土坑			井戸・溝・土坑		土坑		『平安京左京四条一坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-10 埋文研 2006 年
46	左京四条一坊十三町	発掘	池状遺構	掘立柱建物・溝・土坑・井戸・柱穴	柱穴・土坑・溝・堀				土取穴		『平安京左京四条一坊十三町一壬生坊城町の調査―』古代文化調査会 2011 年
47	左京四条一坊十三町	試掘			土坑	土坑					『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』文化観光局 1989 年
48	左京四条一坊十三町	立会			落込	整地層					『京都市内遺跡立会調査概報 平成 9 年度』文化市民局 1998 年
49	左京四条一坊十四町	発掘				土坑	井戸		井戸・溝・土坑		『20 平安京左京四条一坊十四町跡』『昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011 年
50	左京四条一坊十四町	立会			平安末期～鎌倉：包含層				包含層	包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 19 年度』文化市民局 2008 年
51	左京四条一坊十五町、六角小路	立会					東西溝・井戸				『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 57 年度』文化観光局 1983 年
52	左京四条一坊十五町、大宮大路	試掘			湿地状堆積						『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 59 年度』文化観光局 1985 年
53	左京四条一坊十六町	立会	包含層						包含層	包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』文化観光局 1989 年
54	左京五条一坊一町、朱雀大路	立会			朱雀大路東側溝・包含層						『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 60 年度』文化観光局 1986 年
55	左京五条一坊一町	立会				包含層				包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 63 年度』文化観光局 1989 年
56	左京五条一坊一町	立会		南北溝							『京都市内遺跡立会調査概報 平成 10 年度』文化市民局 2000 年
57	左京五条一坊一町	立会		湿地状堆積							『京都市内遺跡立会調査概報 平成 16 年度』文化市民局 2006 年
58	左京五条一坊二町、朱雀大路	発掘	朱雀大路路面・東側溝・東築地内溝							掘立柱建物	『平安京左京五条一坊二町（壬生寺境内）一老人ホーム（ウェルエイジ壬生）建設に伴う発掘調査報告書―』財団法人元興寺文化財研究所 2011 年
59	左京五条一坊二町	立会				前期：土坑					『京都市内遺跡立会調査概報 平成 13 年度』文化市民局 2003 年
60	左京五条一坊七町	立会	土坑	土坑		土坑	土坑				『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 57 年度』文化観光局 1983 年
61	左京五条一坊七町	立会	土坑							包含層	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 58 年度』文化観光局 1984 年
62	左京五条一坊八町、坊城小路	立会	東西溝								『4 平安京左京五条一坊八町（O6HL543）』『京都市内遺跡立会調査概報 平成 19 年度』文化市民局 2008 年
63	左京五条一坊八町	詳細分布			包含層						『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和 4 年度』文化市民局 2022 年
64	左京五条一坊九町	発掘			井戸		井戸・溝・堀・暗渠施設・土坑		柵列・土坑		『22 平安京左京五条一坊九町』『昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011 年
65	左京五条一坊十町	発掘			平安後期～室町：井戸・土坑・ビット				土取穴		『14 平安京左京五条一坊』『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1993 年
66	左京五条一坊十町	立会			ビット	前期：包含層				包含層	『京都市内遺跡立会調査概報 平成 18 年度』文化市民局 2007 年
67	左京五条一坊十五町	発掘			井戸		戦国：土取穴 室町～江戸：土坑・柱穴				『11 平安京左京五条一坊』『昭和 62 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991 年

埋文研→財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 文化市民局→京都市文化市民局 文化観光局→京都市文化観光局

第Ⅲ章 調査成果

1 基本層序（図7・8）

調査地における地表面の標高は30.2～30.5mを測る。当地の基本層序は、地表より近現代盛土、近世耕作土、各遺構面を成立させる第1～3層及び基盤層によって構成される。

地表面より0.5～1.0m下には近世耕作土が堆積しており、その直下より第1層（13～17層）を確認した。標高は上面が29.6m、下面が29.4mを測る。Y=-23,347以西では暗灰黄色泥砂層と黄褐色砂泥層が分布するが、それより東では暗灰黄色細砂層の下に炭化物と土師器皿片を多量に含む黄灰色泥砂層が認められた。第1層からは南北朝期から安土・桃山時代の遺物が確認されたことから、当該時期に成立した整地層と推測される。

この第1層を除去したところ、第2層（22～24層）を検出した。Y=-23,355以西及びY=-23,342.5以東には湿地状堆積である灰色～黄灰色シルト層が分布し、その間に小礫混じりの暗灰黄色泥砂層が堆積する。調査区西側で認められた地業016・瓦列018・礎盤石017は湿地状堆積上につくられており、建物1は暗灰黄色砂礫層の上面にて成立していた。標高は上面が29.4～29.5m、下面が29.25～29.4mを測る。層厚は0.10～0.15mで、湿地状堆積が分布する地点にて厚く堆積していた。この層より平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺物が出土しており、当該時期に成立した整地層とみられる。

第3層（34・35層）はY=-23,353以東でのみ確認された。Y=-23,342以西では小礫混じりの黄灰色シルト層、それより東には湿地状堆積である灰色シルト層が分布する。上面は標高29.25～29.4m、下面が標高29.2～29.35mを測る。第3層からも平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺物が出土しており、この時期に成立した整地層と考えられる。第2層と第3層は出土遺物から時期差は認められなかったことから、短期間で繰り返し整地が行われたと推測される。

遺跡基盤層（36～38層）は標高29.3～29.35mで検出した。Y=-23,342以西では褐灰色砂礫層が分布するが、それより東では当該層より上位に灰色細砂～オリーブ黒色シルト層が南北方向でレンズ状に堆積する。いずれも河川堆積であり、調査地の原地形が鴨川扇状地と紙屋川扇状地の間を走る谷地形の堆積によって形成されたことが窺える。

調査は、第1層の上面を第1面、第2層の上面を第2面、第3層の上面を第3面、基盤層上面を第4面として調査を行った。

2 検出遺構（表2）

今回の調査では、第1面にて安土・桃山時代以降の遺構群、第2・3面にて平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺構群、第4面にて平安時代末期の遺構群を検出した。第2・3面の遺構群及びその整地層である第2・3層の出土遺物からは明確な時期差は認められず、調査地において平安時代末期から鎌倉時代初頭の間に整地を伴う改変が3度行われたことが推測される。なお、平安時代末期より遡る遺構の検出は無かった。

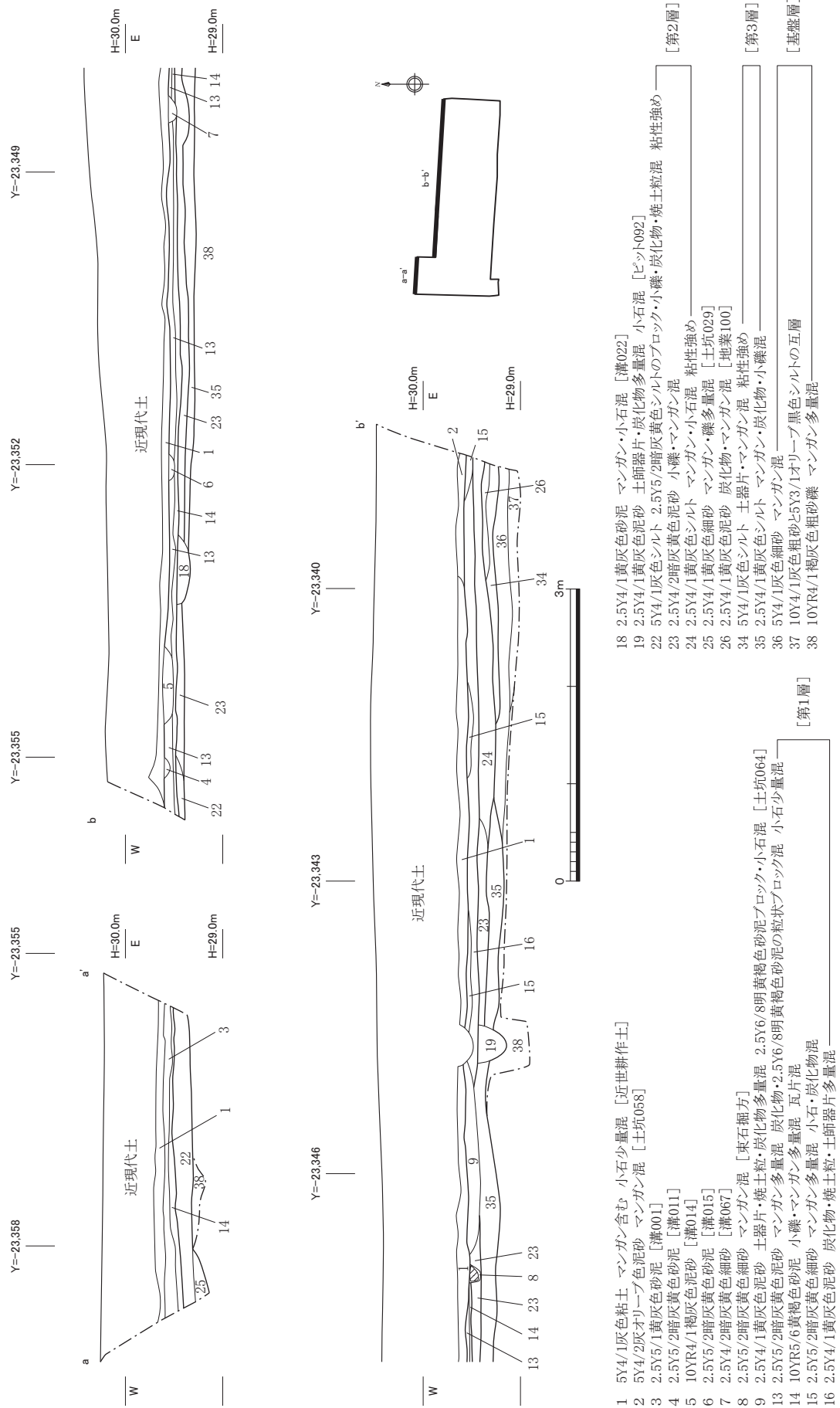


図7 調査区北壁断面図 (1 : 60)

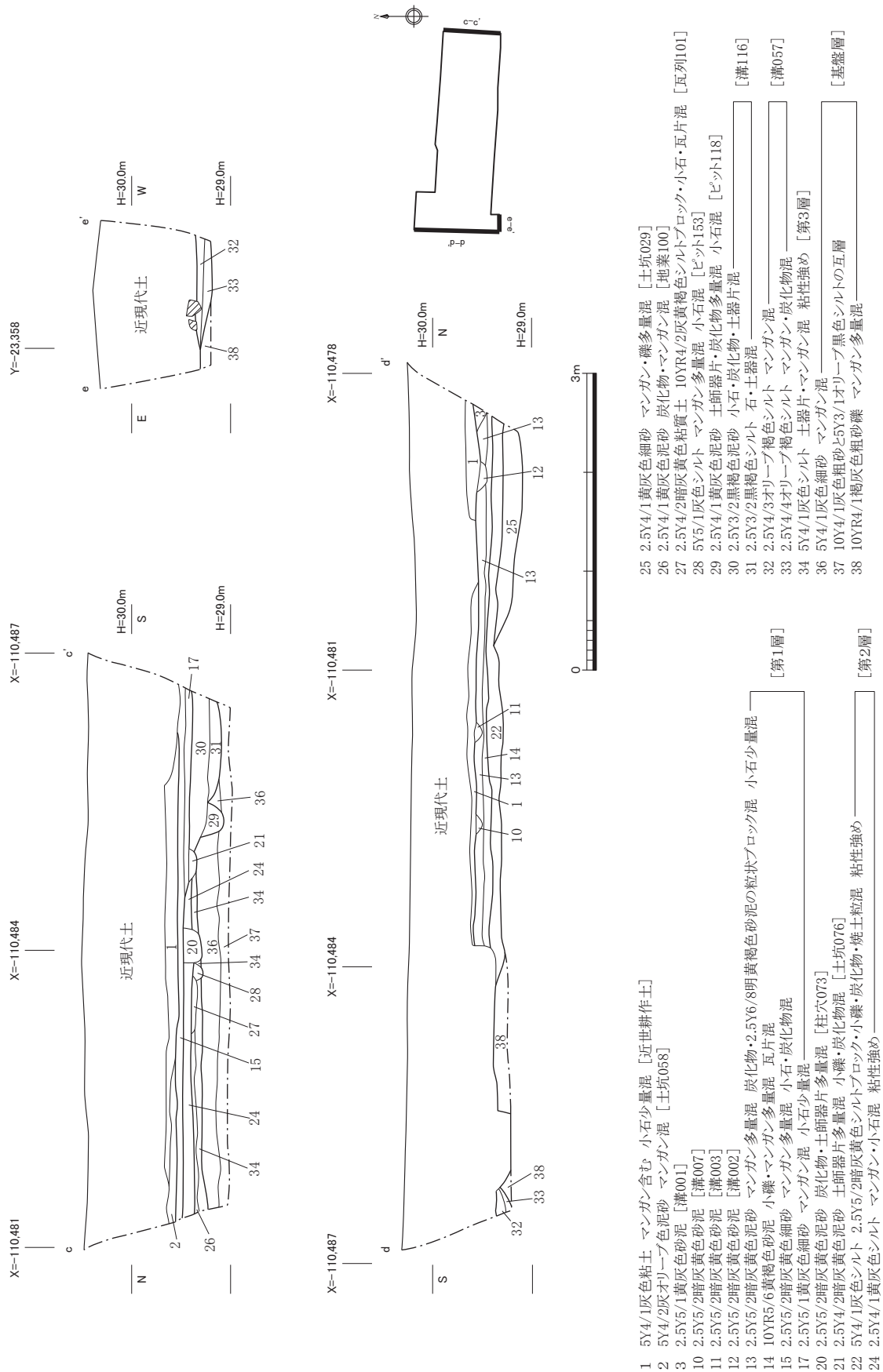


図8 調査区東壁・西壁・拡張部南壁断面図（1：60）

表2 遺構概要表

検出した遺構の総数：128

検出面	所属時期	遺構	備考
第1面	安土・桃山時代以降	素掘り溝群、石列1、土坑064	石列1：東石068・069・070
第2面	平安時代末期～ 鎌倉時代初頭	建物1、溝022、地業016、 礎盤石017、瓦列018、土坑076	建物1：柱穴025・078・080・081・ 082・083・090・091
第3面		地業100、瓦列101、石敷113・114、 溝057・116、柱列1～4、 土坑030・035・037、柱穴117	柱列1：柱穴043・044・045・046 柱列2：柱穴103・104・106・107 柱列3：柱穴109・110・111 柱列4：柱穴125・127・128
第4面	平安時代末期	井戸133、溝136、柱穴149	

(1) 第1面(図9、図版1-1・2、2-1・2)

安土・桃山時代以降の素掘り溝群・土坑・石列を検出した。

素掘り溝群

調査区全体で13条検出した。南北方向或いは東西方向の溝である。溝幅は小型のもので0.2～0.45m、大型のもので0.9mを測る。検出面からの深さはいずれも0.1mに達しない。埋土は暗灰黄色泥砂である。時期の判別できる遺物は出土しなかったが、耕作に伴う溝と推測される。

土坑064

調査区中央東寄りにて検出した。素掘り溝群を切り込んで成立する、平面形が径2.2～2.7mの不定円形状の土坑である。検出面からの深さは0.1mを測る。埋土は土器片・炭化物・明黄褐色砂泥ブロックを多量に含む黄灰色泥砂で、平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺物が多く出土したほか、南北朝期の瓦質土器火鉢も認められた。

石列1(図10)

調査区中央北寄りにて検出した東西方向の石列である。東石068・069・070で構成される。素掘り溝067の直下にて東石069を検出したことから、素掘り溝群より前に成立したものと考えられる。石列1周辺には他にも東石071・072が認められたが、これらは列として並ばなかった。東石間の距離は、東石069・070間にて1.3m(4.3尺)、東石068・069間にて0.8m(2.6尺)を測り、方位は東で北に1.86°振る。東石群上面の標高は約29.5mを測る。東石068・069・071の間には炭化物層の分布が認められた。

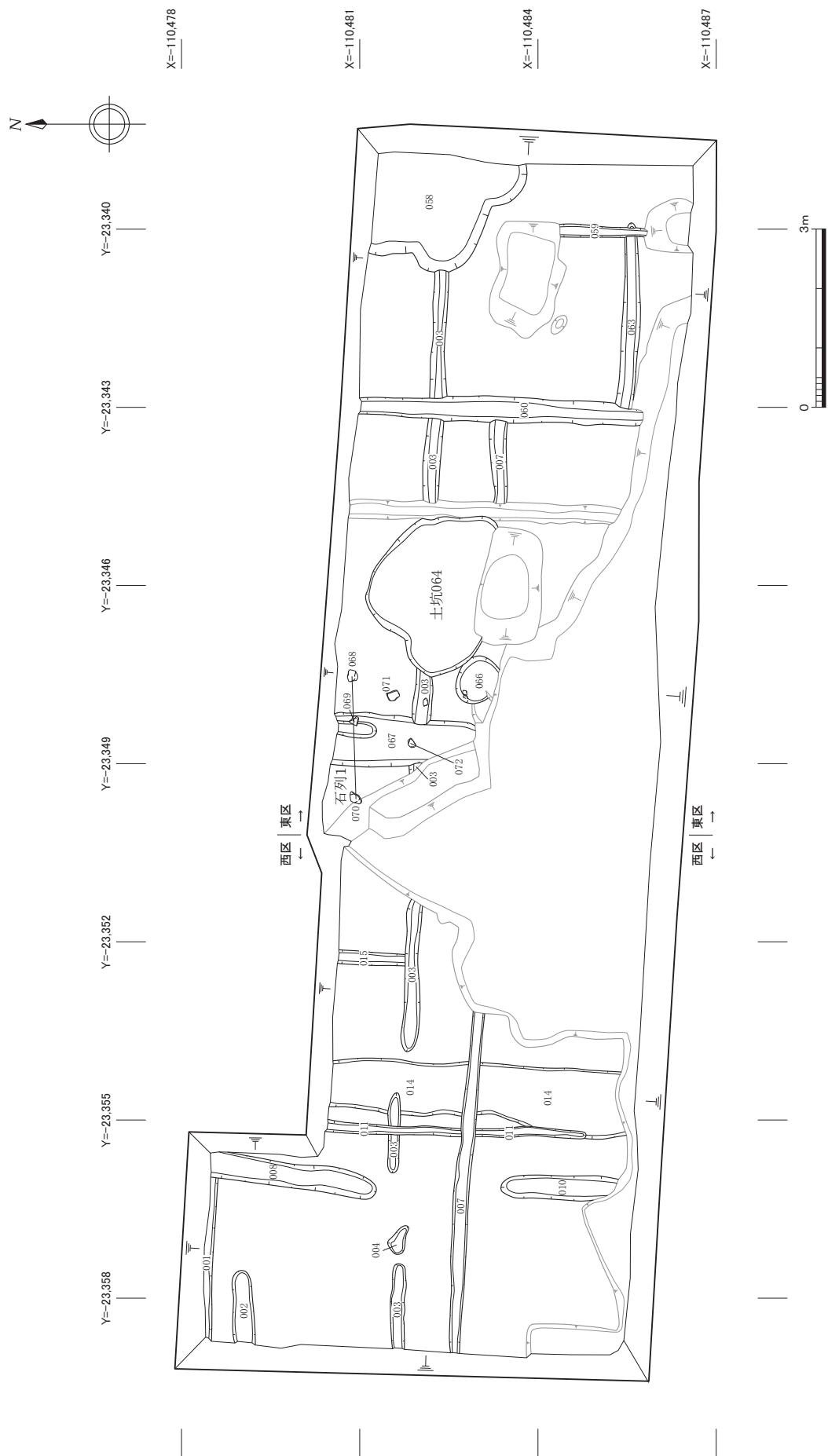


図9 第1面調査区全体平面図 (1 : 100)

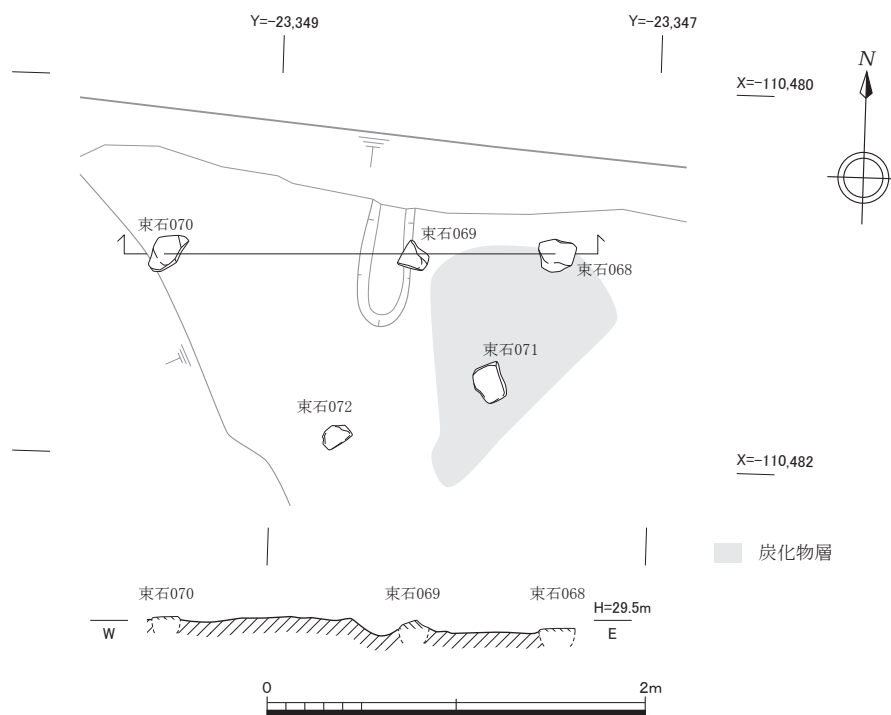


図10 石列1平・断面図（1：40）

（2）第2面（図11、図版3－1・2、4－1・2、5－1・2）

平安時代末期から鎌倉時代初頭の建物とそれに付随する溝・土坑・地業・瓦列・礎盤石を検出した。建物は暗灰黄色砂礫層の上に建てられている一方で、地業・瓦列・礎盤石は湿地状堆積上に築造されていた。

建物1（図12・13、図版6－1～8）

調査区中央東寄りにて検出した。東西3間（10m）、南北2間（3.6m）以上の総柱建物である。柱穴025・078・080・081・082・083・090・091で構成され、建物の北側は調査区外に延びると推測される。柱穴025・078・090では柱穴の底面に扁平な礎石（地下式礎石）が据えられ、柱穴078では礎石の上に柱に用いられたと想定される一辺10～15cmの角材も遺存していた。地下式礎石は長さ約40cm、厚さ約10cmの自然石である。柱穴080・091では柱穴の柱当部に幅8～13cmの板材が立てられた状態で検出された。柱を固定するために板材が詰められた可能性が想定される。柱穴081・082・083では根石が残存しており、柱穴082・083は埋土中より破碎された土師器皿片が多量に出土した。根石は15～30cmの角礫が用いられており、石材は砂岩・チャート・緑泥片岩で、中には砥石からの転用材も認められた。東西の柱間は1.5m（5尺）～3.6m（12尺）、南北の柱間は1.6m（5.3尺）～1.8m（6尺）と、柱間の寸法は不均等である。建物の方位は東で北に1.2°振る。柱穴の平面形は直径0.3～0.7mの円形で、検出面からの深さは0.1～0.45mを測る。柱穴の底面標高は29.0～29.45mである。柱当の埋土は褐灰色砂泥～暗灰黄色シルト、柱掘方の埋土は褐灰色シルト～暗灰黄色泥砂である。柱穴025・090のみ埋土中に焼土粒・炭化物・被熱した瓦片といった火災の廃棄処理物を多量に包含していた。柱穴より平安時代後期から鎌倉時代初頭の土師器皿、白色土器皿、軒丸瓦、青磁・白磁の細片が出土している。

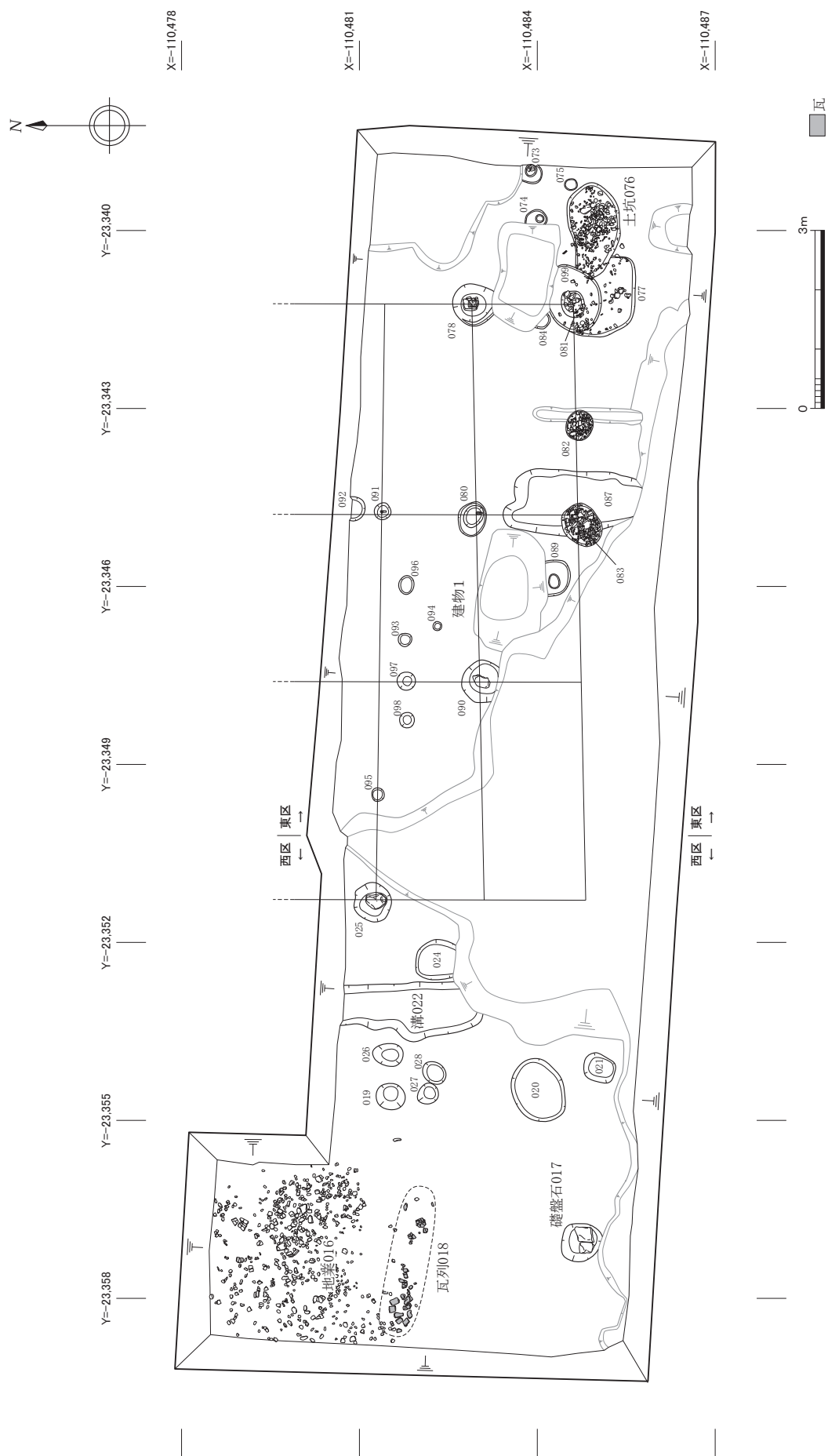


図11 第2面調査区全体平面図 (1:100)

溝022（図12・13）

建物1の西側にて建物と平行する南北溝である。建物の西辺と溝の心々間は1.8m（6尺）を測る。溝幅0.7～1.0m、検出面からの深さ0.13m、底面標高29.35mで、埋土は黄灰色砂泥である。溝022を境として西側には湿地状堆積が分布し、その上には地業や瓦列が構築されており、建物が所在する東側とは様相を異にすることから、建物に伴う区画溝の可能性が考えられる。溝埋土より土師器・瓦の細片が出土した。

土坑076（図13）

建物1の南東側にて検出した。掘方の平面形は歪な楕円形を呈する。検出規模は、南北0.9m、東西1.6m、深さ0.06mを測る。埋土は暗灰黄色泥砂で、その中より破碎された土師器皿片を主体とする遺物が多量に出土した。土坑076の直下にて石敷113が検出されていることから、石敷113の埋立てに際し、土師器皿片が意図的に集中投棄された可能性がある。遺物は平安時代後期から鎌倉時代初頭の土師器皿、白色土器皿、白磁合子蓋などが出土した。

地業016（図14、図版7－1・2、図版8－1）

調査区北西側にて検出した。検出範囲はY=-23,355.8以西、X=-110,481.4以北で、瓦列018より南側は認められない。湿地状堆積である黄灰色シルトを深さ約0.05m掘り込み、約10cm大の瓦片・小礫と土で埋め戻される。埋土は黄灰色泥砂で、平安時代末期から鎌倉時代初頭の土師器皿片を多く含む箇所も認められた。地業に用いられた瓦は比較的硬質で鉾物を含む平瓦が多数を占めるが、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦も少量認められた。瓦は平安時代後期の山城産とみられるものの、両面布目の平瓦なども見受けられる。湿地状堆積上に構築されていることから、整地を行う際の沈下防止を目的として構築されたものと推測される。

瓦列018（図14、図版7－1・2、図版8－2）

調査区西側中央寄りにて検出した東西方向の瓦列である。X=-110,481.75の地点に位置し、Y=-23,356.3より東側には延びないが、残存状態が悪く全容は不明である。瓦列018を境に地業016が南側へ拡がらないことから、境界の役割を有していた可能性がある。瓦は平安時代後期の丸瓦や軒平瓦が用いられていた。

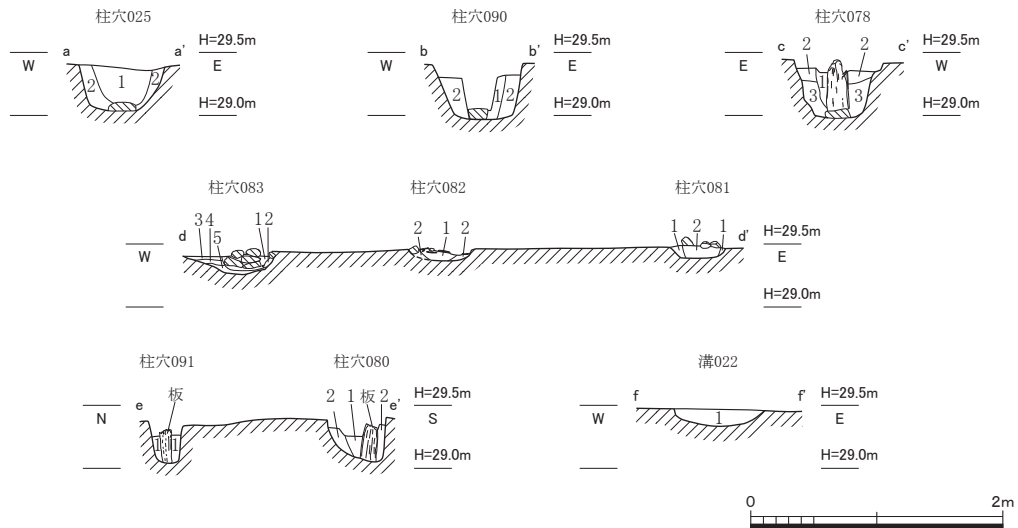
礎盤石017（図14、図版7－1・2、図版8－3）

調査区南西側にて検出した。礎盤石は東西に2基並べて配置され、標高29.4mの高さで面を揃える。いずれも平面形が方形で、東側の礎盤石が長さ33cm、厚さ20cm、西側の礎盤石が長さ25cm、厚さ8cmを測る。石材は東側が凝灰岩、西側が砂岩である。礎盤石据付の掘方埋土は焼土粒・炭化物混じりの黄灰色泥砂で、鎌倉時代初頭の土師器皿片を含んでいた。対となる礎盤石が検出されず、性格不明であるが、建物1の南辺の西延長線上に位置することから、両者の有機的な関連性が想定される。



图12 建物1・溝022平面図（1：60）

建物1



柱穴025

- 1 7.5YR4/1褐灰色砂泥 焼土粒多量混 土器・小石・炭化物混 [柱当]
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 焼土粒・小石混 [掘方]

柱穴078

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト 木・小石混 土器片少量混 [柱当]
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 小石混 炭化物少量混 [掘方]
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 小石混

柱穴080

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 礫・小石・炭化物・土器片混 [柱当]
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト 礫・炭化物混 [掘方]

柱穴081

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 小石・マンガン混
- 2 10YR4/2灰黄褐色細砂 石・炭化物多量混 マンガン混

柱穴082

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 土師器片多量混 炭化物・マンガン・小石混
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 土師器片少量混 炭化物・マンガン・小石混

柱穴083

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト 土師器片・石・瓦混 炭化物・マンガン混
- 2 2.5Y3/2黒褐色泥砂 小石・マンガン混
- 3 2.5Y4/1黄灰色砂泥 土師器片多量混 炭化物・マンガン混
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 マンガン混
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 小石混

柱穴090

- 1 10YR4/1褐灰色砂泥 礫・炭化物混 5YR5/6明赤褐色シルトブロック混 [柱当]
- 2 7.5YR4/1褐灰色シルト 礫多量混 [掘方]

柱穴091

- 1 10YR4/1褐灰色シルト 礫・炭化物混

溝022

- 1 2.5Y4/1黄灰色砂泥 マンガン・小石混

土坑076

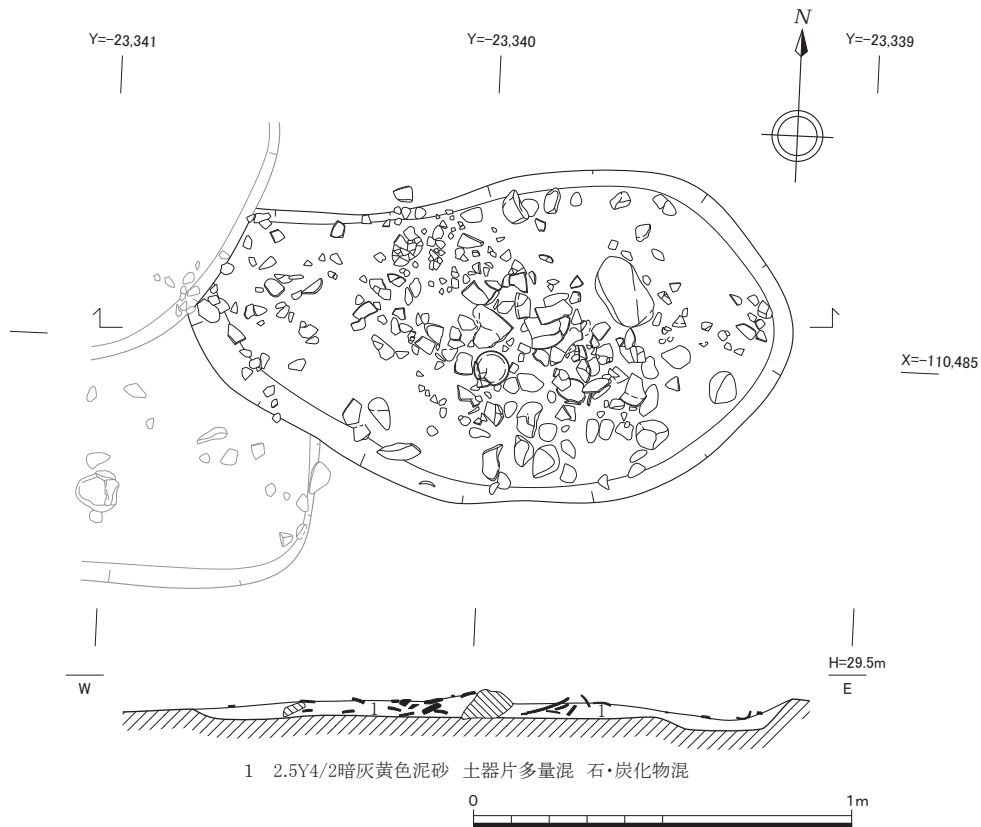


図13 建物1・溝022断面図、土坑076平・断面図（1：20、1：60）



図14 地業016・瓦列018・礎盤石017平・断面図（1：40）

(3) 第3面 (図15、図版9-1・2、10-1・2、11-1・2)

平安時代末期から鎌倉時代初頭の地業・瓦列・石敷・柱列・土坑・溝・柱穴を検出した。調査区東側に集中する瓦列・石敷・柱列は一連のものと推測される。

地業100 (図16、図版12-1)

調査区北東側にて検出した。検出範囲はY=-23,340.6以東、X=-110,483以北で、瓦列101より南側には分布しない。湿地状堆積である灰色シルト層を深さ約0.05m掘り込み、約10cm大の瓦片・小礫と土で埋め戻される。埋土は黄灰色泥砂である。地業に用いられた瓦は平瓦のみである。瓦は地業016で用いられたものと比べて軟質で、鉍物を含まない。平安時代後期以前の瓦とみられる。湿地状堆積上に構築されていることから、整地を行う際の沈下防止を目的として構築されたものと推測される。

瓦列101 (図16、図版12-1)

調査区東側中央北寄りにて検出した東西方向の瓦列である。X=-110,483.4を中軸とし、方位は西で北に1.6°振る。半截された平瓦(熨斗瓦)が2列に並べて敷かれており、瓦の下には裏込として細石が充填されていた。裏込の掘方は浅い溝状を呈し、幅は0.2~0.7m、深さは0.02~0.04m、埋土は暗灰黄色粘質土である。Y=-23,340.15より西側は瓦が抜き取られ、裏込の掘方である溝状遺構のみが検出された。この溝はY=-23,344.3の位置で止まり、西には延びない。用いられた熨斗瓦は平安時代後期以前に属し、平瓦として完形に近くなるものも認められた。瓦列101の南側に位置する石敷113・114と対になるものとみられ、両者の心々距離は1.8m(6尺)を測る。

石敷113 (図16、図版12-1)

調査区東側中央南寄りにて検出した東西方向の礫敷である。検出範囲は南北0.5~0.7m、東西約1.7mで、5~10cm大の円礫が密に敷かれていた。石敷の形成層はにぶい黄褐色泥砂から成る。2段掘り構造を呈する溝116の埋土上面にて検出されたが、溝116の1段目で認められた柱列4の柱穴部分には分布しない。このことから、溝116・柱列4の埋没後に石敷は敷かれたものとみられるが、柱列4との相関関係は不明である。

石敷114 (図16)

調査区東側中央南寄りにて検出した。柱列3柱穴109から溝116北肩の間に分布する。検出範囲は南北約0.4m、東西約1.2mで、5~10cm大の礫が疎らに敷かれていた。検出状況から破壊されたものである可能性がある。礫に混じって平安時代前期の須恵器蓋と平安時代後期以前の熨斗瓦が出土した。

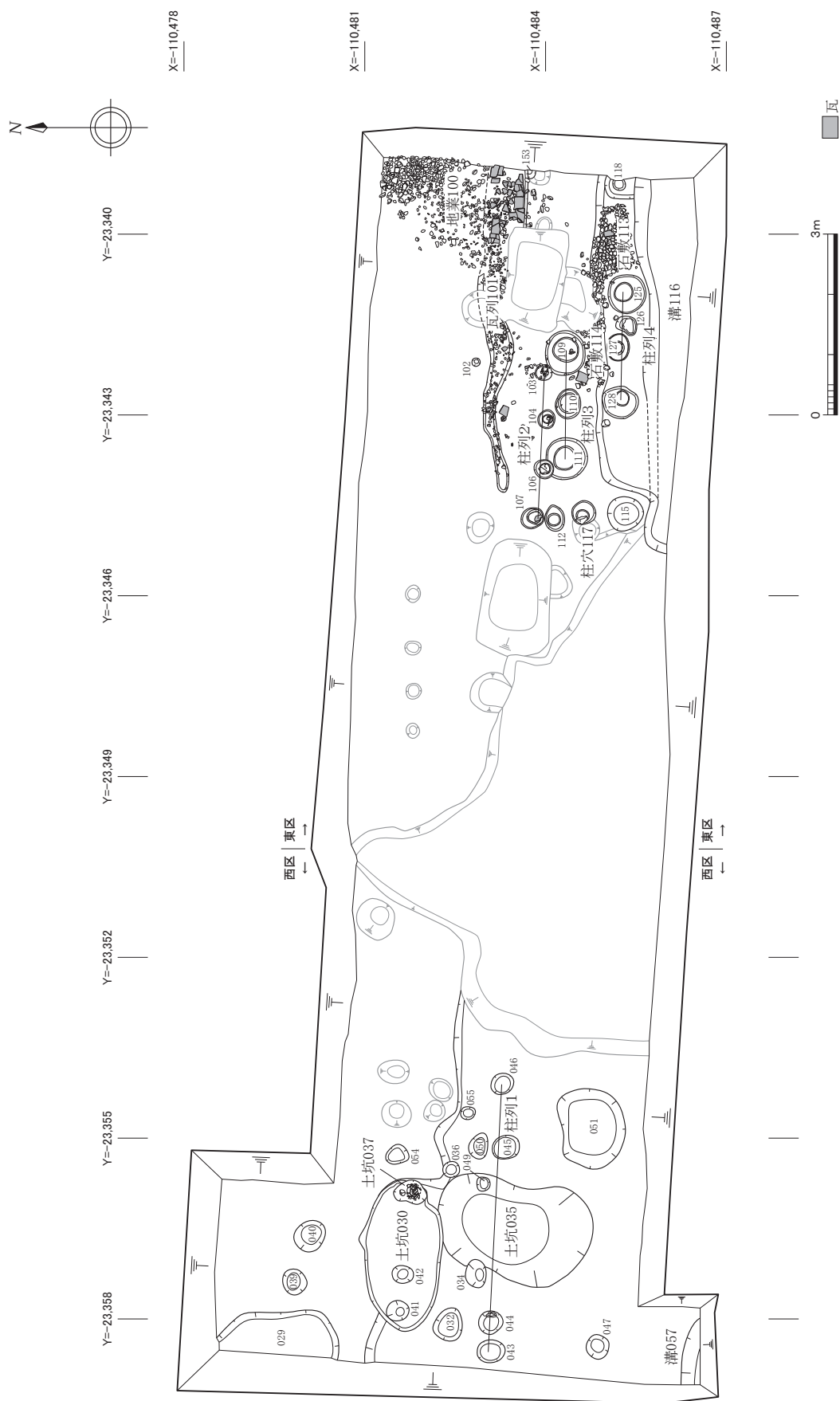


図15 第3面調査区全体平面図 (1 : 100)

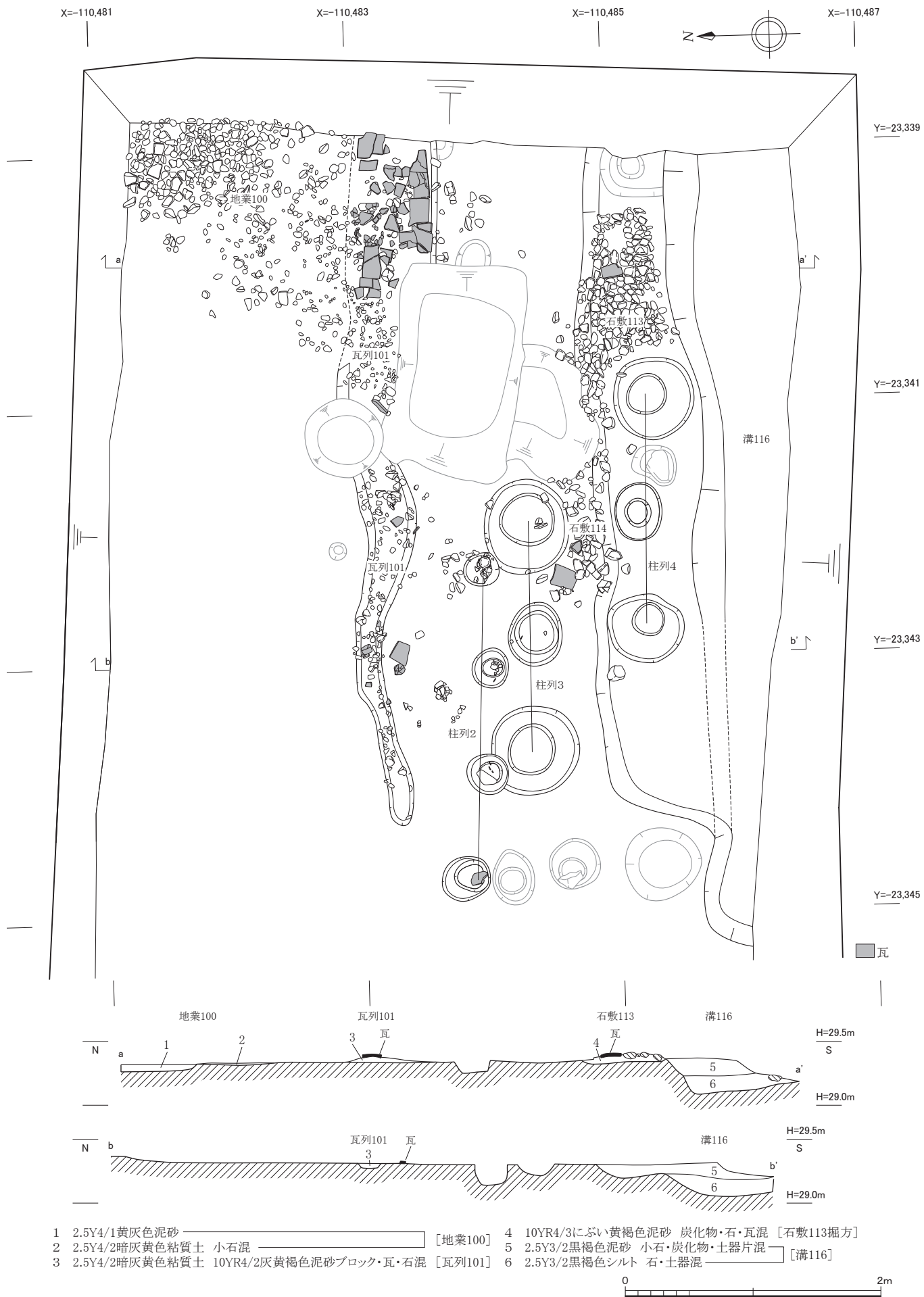


図16 地業100、瓦列101、石敷113・114、溝116平・断面図（1：40）

柱列2（図17、図版12-2、13-1～4）

瓦列101と石敷113・114の間にて検出した東西方向の柱列である。X=-110,483.9の位置にて3間分検出した。柱穴103・104・106・107で構成され、柱間は約0.8m（2.7尺）等間、軸は西で北に約2.5°振る。柱穴の平面形は直径0.3～0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは0.15～0.2m、底面標高は29.1～29.2mを測る。掘方埋土は暗オリーブ褐色～黒褐色泥砂、柱当埋土は暗オリーブ褐色～暗灰黄色泥砂である。柱列3の柱穴109・111を切っていることから、柱列3の埋没後に成立したものと推測される。柱穴より平安時代後期から鎌倉時代初頭の土師器皿、瓦質土器盤が出土している。

柱列3（図17、図版12-2、13-5～7）

瓦列101と石敷113・114の間にて検出した東西方向の柱列である。X=-110,484.35の位置にて2間分検出した。柱穴109・110・111で構成され、柱間は0.9m（3尺）等間、軸は正方位となる。柱穴の平面形は直径0.5～0.75mの円形で、検出面からの深さは0.1～0.3m、底面標高は29.0～29.2mを測る。掘方埋土は暗オリーブ褐色泥砂、柱当埋土は炭化物混じりの暗オリーブ褐色泥砂～黄灰色シルトである。柱穴109より平安時代後期から末期の瓦質土器盤、白色土器蓋、剣頭文軒平瓦が出土した。

柱列4（図17、図版17-1・3～5）

調査時は第4面の遺構としていたが、出土遺物に鎌倉時代初頭（6B段階）の遺物を含むことから、第3面の遺構とみなした。2段掘り構造を呈する溝116の1段目部分にて検出した東西方向の柱列である。X=-110,485.25の位置にて2間分検出した。柱穴125・127・128で構成され、柱間は0.9m（3尺）等間、軸は正方位となる。柱穴の平面形は直径0.4～0.65mの円形で、検出面からの深さは0.1～0.15m、底面標高は29.0～29.1mを測る。掘方埋土は暗灰黄色泥砂、柱当埋土は炭化物混じりの黒褐色～暗灰黄色泥砂である。柱穴より平安時代末期から鎌倉時代初頭の土師器皿、東播系須恵器鉢の細片が出土した。

柱列1（図18、図版14-1～5）

調査区西側中央南寄りにて検出した東西方向の柱列である。X=-110,483.15の位置にて3間分検出した。柱穴043・044・045・046で構成され、柱間は0.5m（1.7尺）～2.9m（9.6尺）と、柱間の寸法は不均等である。柱穴044・045間は土坑035によって削平されている可能性がある。軸は西で北に約2.5°振る。柱穴の平面形は直径0.35～0.45mの円形で、検出面からの深さは0.06～0.13m、底面標高は29.1～29.2mを測る。掘方埋土は黄灰色泥砂～シルト、柱当埋土は炭化物・焼土粒混じりの黄灰色泥砂～シルトである。柱穴より平安時代末期から鎌倉時代初頭の土師器皿、瓦の細片が出土した。柱列2の西側延長部に柱列1が位置していることから、一連の柵列になる可能性がある。

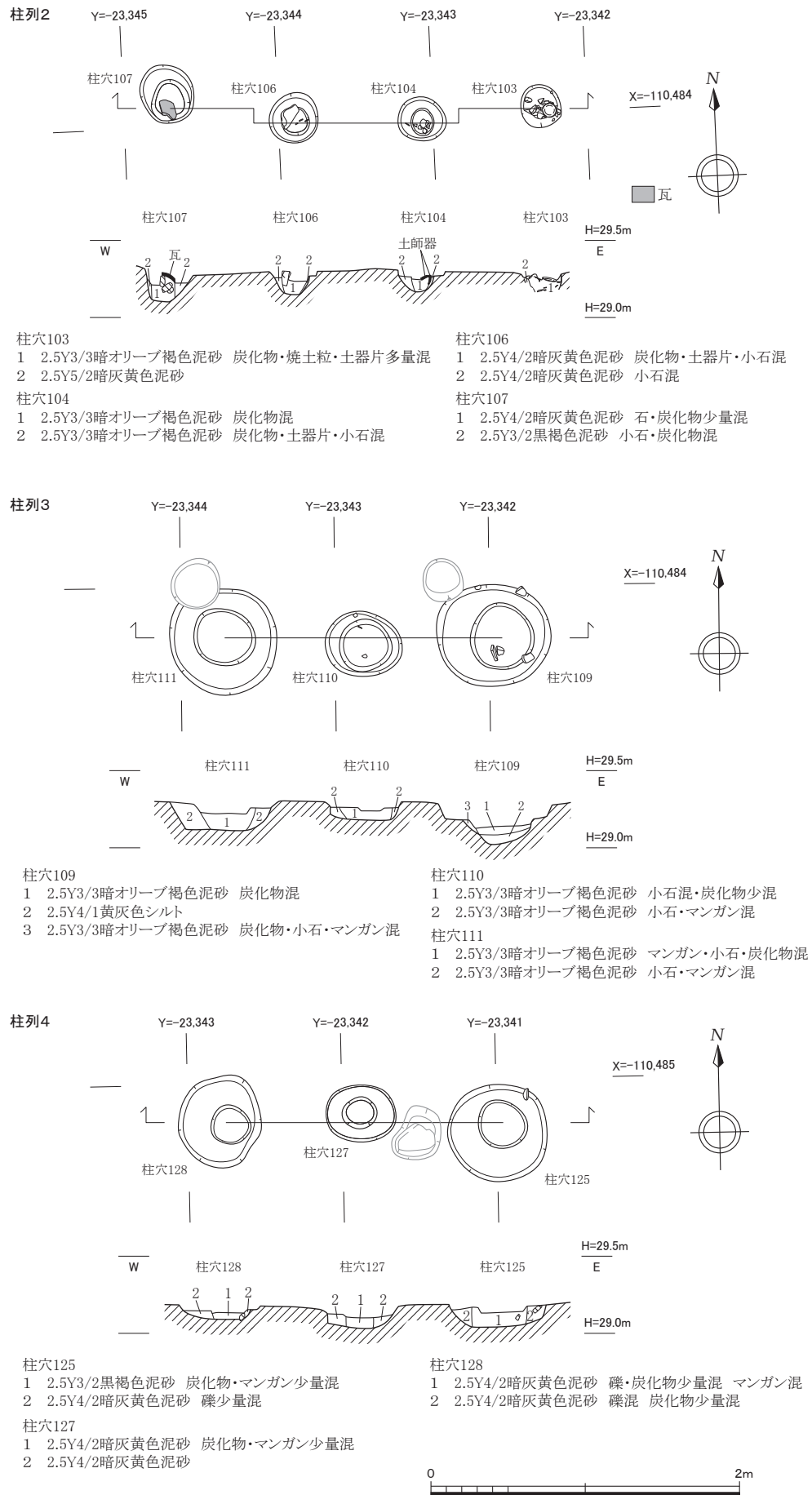


図17 柱列2・3・4平・断面図（1：40）

溝116（図16、図版12－2、13－8）

調査区南東側にて検出した東西方向の溝である。調査区内では6.2m分検出した。東端は調査区外に延びるが、西端はY=-23,345.3の位置で止まる。溝の南肩は今回の調査では確認されなかった。溝は2段掘り構造を呈する。1段目は検出面から約0.1mの深さで認められ、溝の北肩より0.6～0.8mの幅で広がるが、Y=-23,344.3より西には続かない。溝底までの深さは検出面より約0.3mで、標高は29.1mを測る。埋土は上層が炭化物・土器片混じりの黒褐色泥砂、下層が黒褐色シルトである。いずれの層からも平安時代後期から鎌倉時代初頭に帰属する遺物が出土しており、時期差は認められない。18・19の調査で検出された四条大路北築地内溝の東側延長部に位置することから、同じく四条大路北築地内溝と推測される。

溝057（図18）

調査区南西側拡張部にて検出した。18・19の調査で検出された四条大路北築地内溝の東側延長部に位置することから、同じく四条大路北築地内溝と考えられる。検出面からの深さは0.17m、底面標高は29.2mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトである。

土坑035（図18、図版15－3）

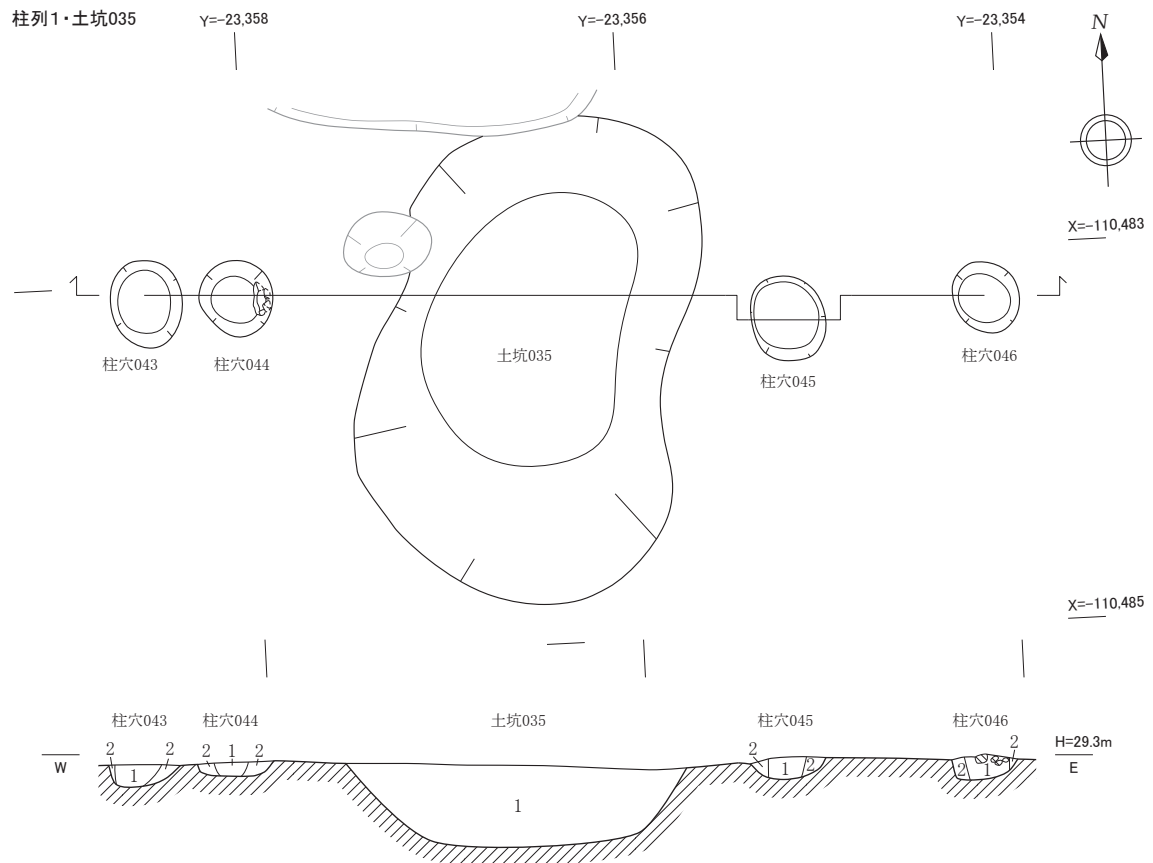
調査区西側中央南寄りにて検出した。掘方の平面形は歪な楕円形を呈する。検出規模は、南北2.6m、東西1.7m、深さ0.45mを測る。埋土は炭化物・焼土粒混じりの暗灰黄色粘土である。この層より平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺物が多量に出土したほか、平安時代前期の墨書土器・緑釉陶器なども認められた。

土坑030・037（図19、図版15－1・2）

柱列1・土坑035の北側にて、南北1.3m、東西2.5mの平面楕円形を呈する土坑030、その東側底面に南北0.55m、東西0.4mの不定楕円形を呈する土坑037を検出した。土坑037においては、東播系須恵器鉢の破片を直径0.25m程の円弧状に組み立て、その中に拳大の礫を2基据えた状態で認められた。土器埋納遺構とみられる。土坑030の埋土は細石を多量に含む黄灰色細砂で、土坑037の埋土は暗灰黄色細砂である。検出面からの深さはいずれも0.13mで、底面標高は29.2mを測る。須恵器鉢の検出標高は29.3mである。柱列1・2が柵列となる可能性を想定すると、土地境界に隣する場所に位置することから、地鎮に関する遺構と考えられる。東播系須恵器鉢はⅡ-2類に該当し、12世紀後半の所産とみられる。

柱穴117

柱列2・3の南西側にて検出した。柱穴の平面形は径0.4mの円形で、検出面からの深さは0.23m、底面標高は29.5mを測る。掘方の埋土は暗オリーブ褐色泥砂、柱当の埋土は暗灰黄色泥砂である。底面より0.1m上にて鎌倉時代初頭の土師器皿が出土した。



柱穴043

- 1 2.5Y4/1黄灰色泥砂 マンガン多量混 小石混
- 2 2.5Y4/1黄灰色シルト 小石混

柱穴044

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 マンガン多量混 小石少量混
- 2 2.5Y4/1黄灰色泥砂 マンガン多量混 小石多量混

土坑035

- 1 2.5Y4/2暗灰黄色粘土 マンガン・小石・炭化物・焼土粒混

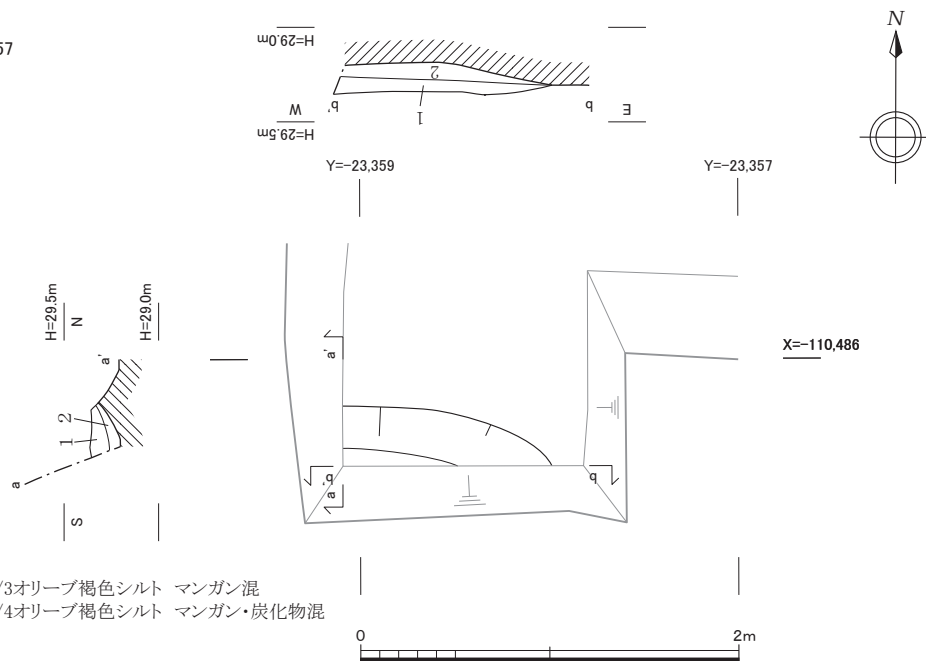
柱穴045

- 1 2.5Y4/1黄灰色泥砂 マンガン多量混 礫・瓦片・焼土粒混
- 2 2.5Y4/1黄灰色泥砂 マンガン・小石多量混

柱穴046

- 1 2.5Y4/1黄灰色シルト マンガン混 炭化物・焼土粒多量混
- 2 2.5Y4/1黄灰色シルト マンガン混

溝057



- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト マンガン混
- 2 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト マンガン・炭化物混

図18 柱列1・土坑035・溝057平・断面図（1：40）

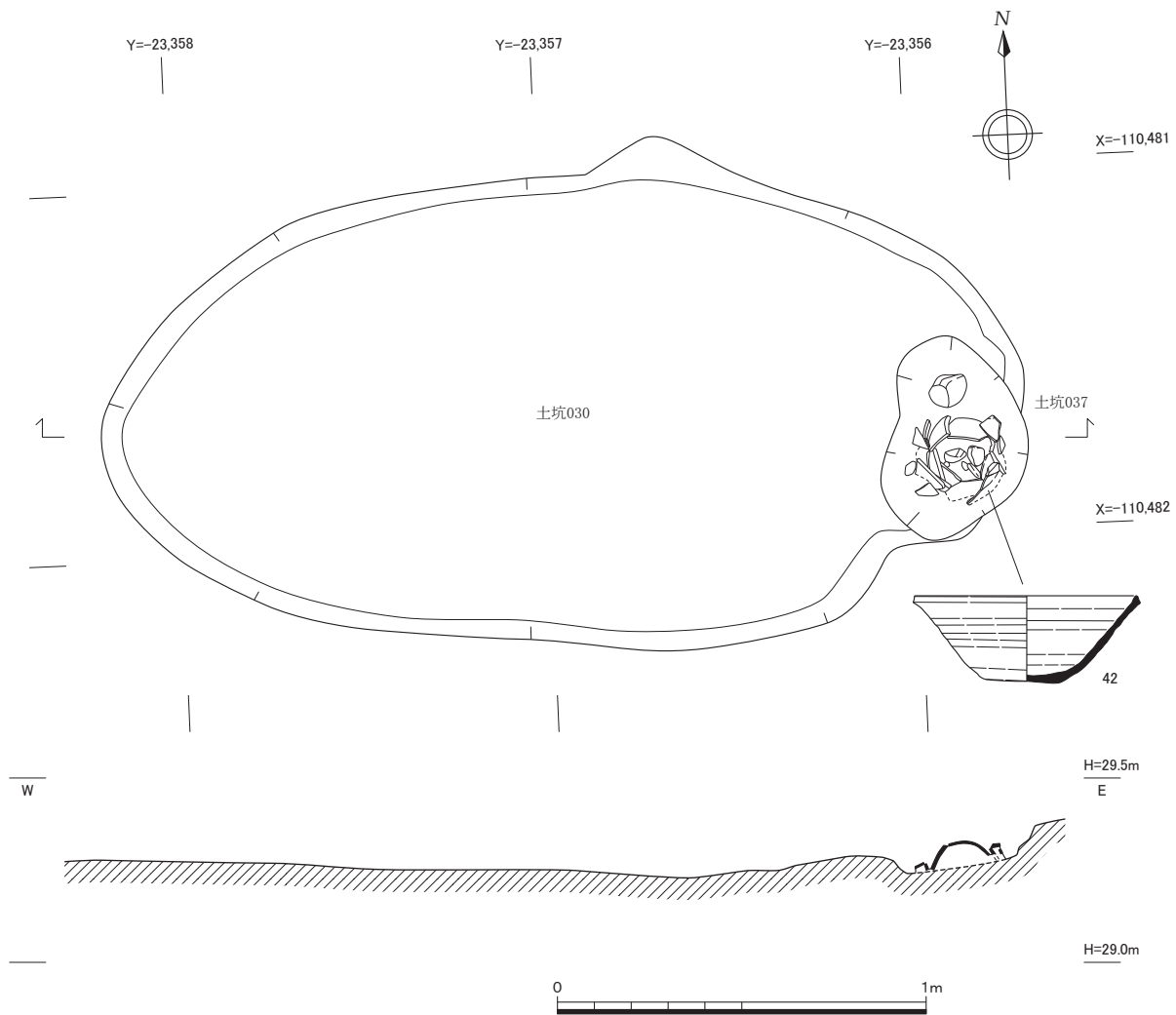


図19 土坑030・037平・断面図（1：20）

（4）第4面（図20、図版16－1・2）

調査区東側のみ分布する第3層の直下にて、平安時代末期の井戸・溝・柱穴群を検出した。第2面及び第3面の遺構群とは異なり、鎌倉時代初頭（6B段階）の遺物を含まず、平安時代末期の範疇に収まるものとみられる。なお、第4面において検出された柱穴群は、柱列としてのまとまりを確認することはできなかった。ここでは、柱穴149のみ取り上げる。

井戸133（図21・22、図版18－1～3）

調査区東側北寄りにて検出した方形木組井戸である。井戸の掘方は直径1.4mの円形で、井戸枠は一辺約0.7mを測る。井戸底部までの深さは検出面より約0.5m、標高28.75mを測る。井戸枠の構造は方形縦板組横棧留型で、隅柱や支柱は認められない。縦板は幅約10cmで、各面に6枚ずつ用いられる。検出面より深さ0.25m、標高29.0mの段階にて横棧を1段分確認した。横棧はヒノキ材が用いられている。それより下位には縦板が続かず、底部施設として直径0.5mの曲物を検出した。曲物より上位の埋土は灰黄褐色泥砂、曲物内の埋土は上層が炭化物混じりの暗灰黄色泥砂、下層が

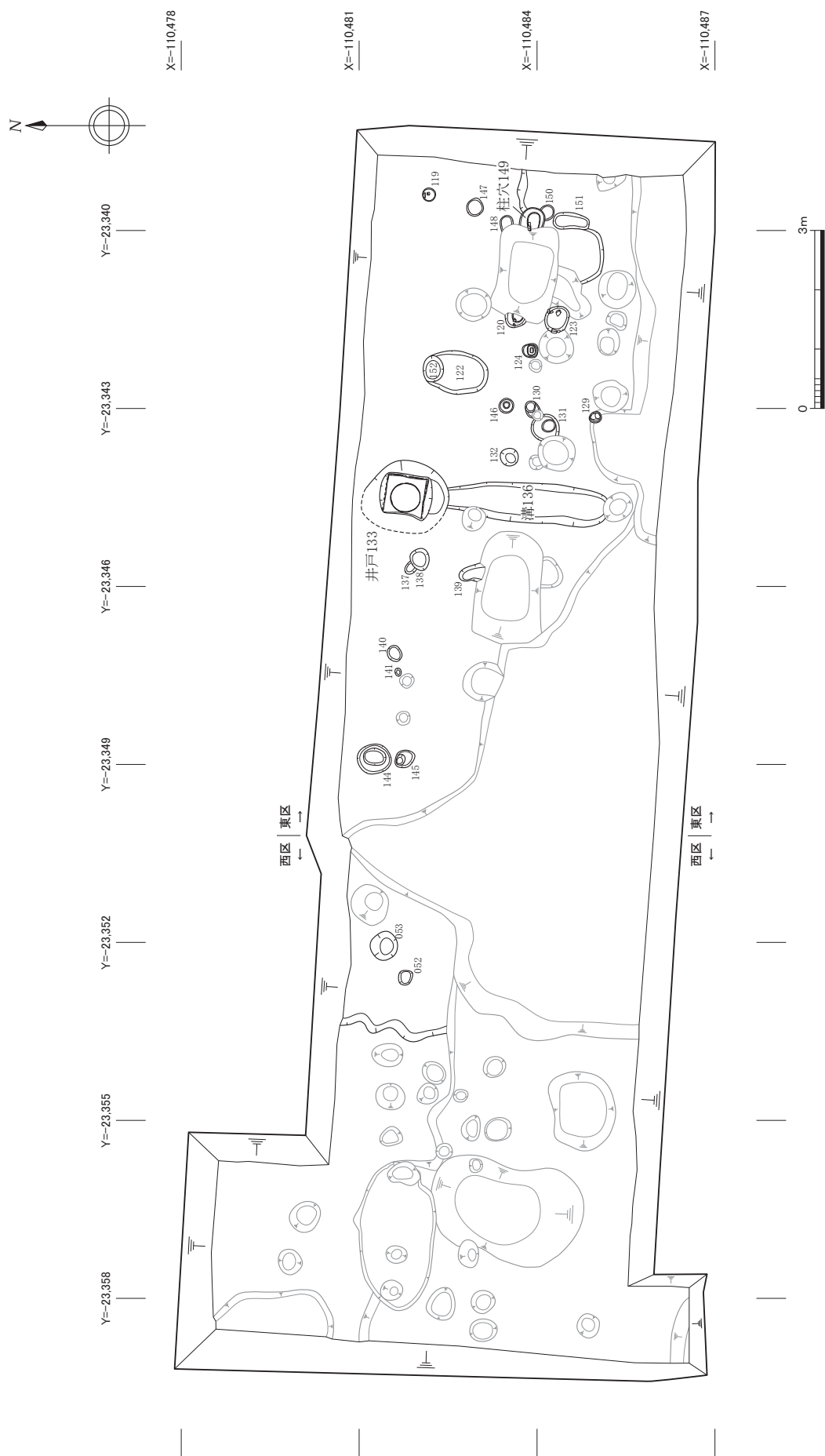


図20 第4面調査区全体平面図 (1 : 100)

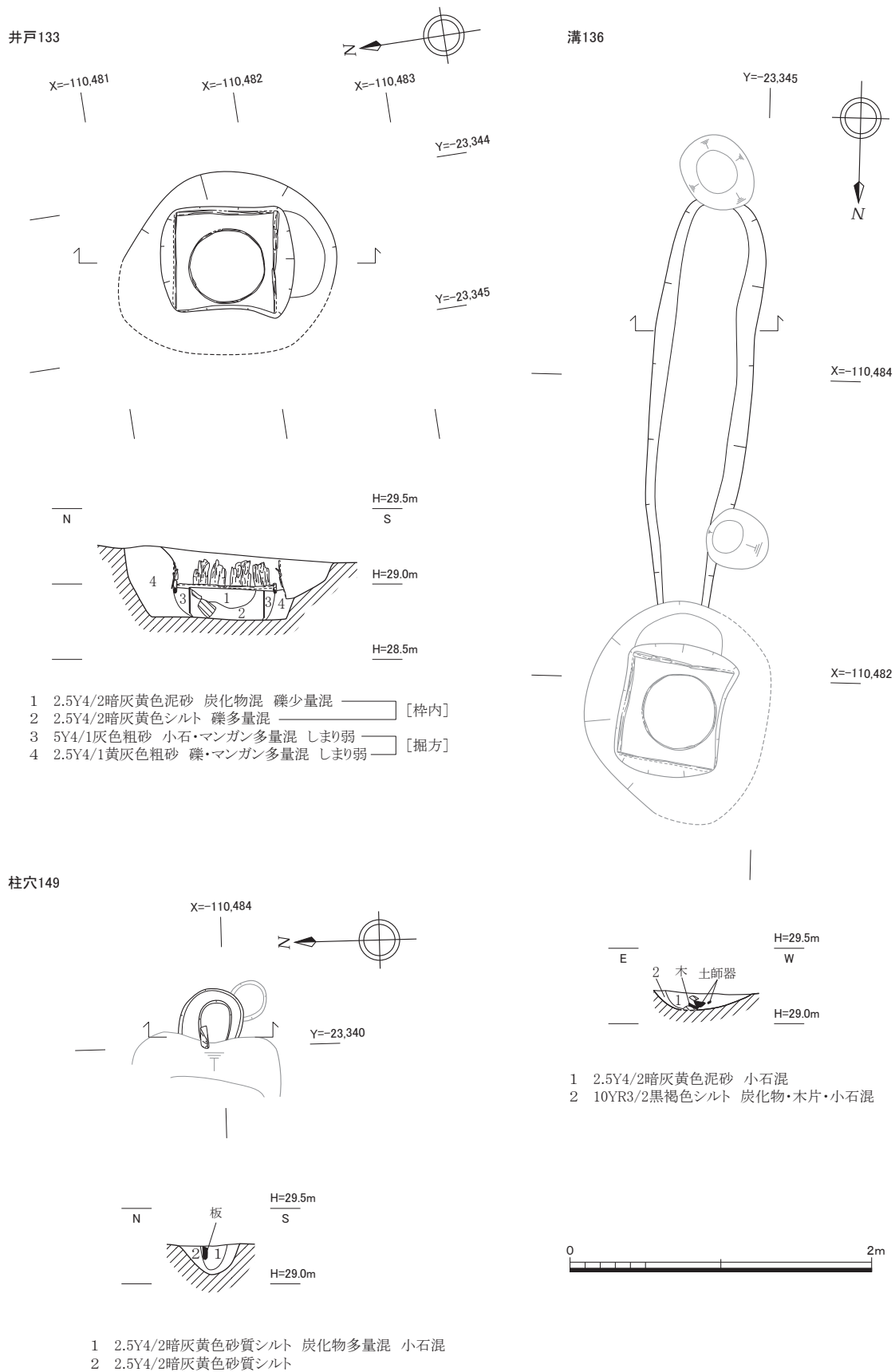


図21 井戸133・溝136・柱穴149平・断・立面図（1：40）

約10cm大の大礫を多く含む暗灰黄色シルトである。掘方の埋土は、縦板と曲物の間を充填する土が灰色粗砂、縦板の掘方の埋土が黄灰色砂礫である。曲物内埋土より平安時代後期から末期の土師器皿・白磁皿、掘方埋土より同時期の東播系須恵器鉢が出土したほか、曲物直上より平安時代後期以前の面戸瓦・熨斗瓦が認められた。

溝136（図21、図版17－6）

井戸133の南側にて検出した南北方向の溝である。検出長は2.7m、幅約0.7m、深さ0.13mで、溝の北端は井戸133によって切られている。溝の中軸はY=-23,344.6に位置し、北で東に4.3°振る。埋土は暗灰黄色泥砂を主体とするが、溝136南半のみ東肩から底面にかけて炭化物層が分布し、その内より枝材がまとまって出土した。他、平安時代末期の土師器皿が確認されている。

柱穴149（図21）

調査区東側中央寄りにて検出した。柱穴の西側は攪乱によって削平されている。検出規模は南北0.85m、東西0.7m、深さ0.2m。掘方埋土は暗灰黄色砂質シルト、柱当埋土は炭化物を多く含む暗灰黄色砂質シルトである。柱当に幅15cmの板材が立てられた状態で検出された。柱を固定するために板材が詰められた可能性が推測される。埋土より平安時代末期の土師器皿・盤が出土した。



図22 井戸133 横桟

3 出土遺物

遺物はコンテナに30箱分出土した。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白色土器、陶磁器、瓦、石製品、木製品、土製品が出土している（表3）。

第1面に属する遺構、第1層では南北朝期から安土・桃山時代の遺物が認められたが、平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺物も多く含まれていた。第2～4面に属する遺構、第2・3層では平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺物が多量に出土した。土師器皿と瓦が大半を占める中、東播系須恵器鉢・瓦質土器盤・白磁碗・白色土器なども見受けられる。第4面の遺構においては鎌倉時代初頭の遺物の出土は認められなかった。また、平安時代前期から中期の遺物も混入していた。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
平安時代 前期～中期	須恵器、緑釉陶器、瓦		須恵器3点、緑釉陶器4点、 瓦7点		
平安時代後期～ 鎌倉時代初頭	土師器、須恵器、瓦器、 瓦質土器、白色土器、 青磁、白磁、施釉陶器、 輸入陶器、瓦、石製品、 木製品		土師器32点、須恵器3点、 瓦器2点、瓦質土器5点、 白色土器7点、青磁1点、 白磁8点、施釉陶器1点、 輸入陶器1点、瓦23点、 石製品1点、木製品1点	木製品2点	
南北朝期～ 安土・桃山時代	土師器、瓦質土器、青磁、 施釉陶器、土製品		土師器2点、瓦質土器1点、 青磁1点、土製品1点	施釉陶器1点	
合計		31 箱	104 点（6箱）	3 点（2箱）	23 箱

* コンテナ箱数は、整理段階で1箱増加した。

（1）第4面

井戸133（図23、図版19－1）

1は土師器の皿Nである。口径11.0cm、器高1.6cmを測る。口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部はわずかに外反する。6 A段階に属し、12世紀末葉に比定される。2は白磁皿である。底径4.0cm。平高台で、底部から体部にかけて丸く仕上げられる。胎土はやや黄みを帯び、釉薬は灰白色を呈する。11世紀後半から12世紀前半に属する。3は東播系須恵器鉢の口縁部で、口縁端部が外側に突出する。Ⅱ-2類に該当し、12世紀後半に比定される。4は面戸瓦である。丸瓦を縦に半截したもので、厚さ1.2cmを測る。凸面は調整をナデ消すが、凹面は布目が認められる。凹面に煤の付着が認められる。5は熨斗瓦で、平瓦を縦に半截している。凸面は縄タタキ及びユビ圧痕、凹面は布目が残存する。縄の幅は2.0mmである。凹凸面に離れ砂とみられる3.0～5.0mmの黒色・白色鉱物が多く付着する。厚さは2.4cmを測る。いずれも9世紀から11世紀以前の所産とみられる。1・2が曲物内、3が掘方、4・5が曲物直上にて出土した。

溝136（図23、図版19－1）

6は土師器の皿Nである。口径9.0cm、器高1.9cm。口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部はわずかに外反する。6 A段階に属し、12世紀末葉の所産とみられる。

柱穴149（図23、図版19－1）

7・8は土師器である。7は皿Nで、口径9.4cm、残存器高1.7cmを測る。口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出する。6 A段階に属し、12世紀末葉に比定される。8は盤である。口径29.4cm、器高6.5cm。粘土紐を上積みし、ナデによってつなぎ合わせる。口縁端部に煤が付着する。12世紀後半に属する。

（2）第3層・第3層直上

第3層（図23、図版19－2）

9～11は土師器の皿Nである。9・10は口径9.5～10.1cm、器高1.4cmを測る。いずれも口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出する。口縁端部に油煙痕の付着が認められる。11は口径11.8cm、残存器高2.5cmで、口縁部は外方に向かって直線的に立ち上がる。6 A段階に属し、12世紀末葉に比定される。12は瓦器碗である。口径13.8cmで、口縁部に強いヨコナデ、体部外面にユビオサエが施されるが、内面にはミガキが認められない。焼成不良のため、内面が土師質を呈する。和泉型のⅢ-2類で、12世紀末葉から13世紀初頭の所産と考えられる。13は須恵器の杯蓋である。平らな天井部に「三」と読める墨書が認められるが、大半が欠損しており全容は不明である。

第3層直上（図23、図版19－2）

14・15は土師器の皿Nである。14は口径9.4cm、器高2.4cmである。口縁部には2段ナデが施され、口縁端部は上方に突出して仕上げられる。5 B段階に属し、12世紀中葉から後葉に比定される。15は口径13.0cm、器高2.8cmを測る。口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部に向かって直線的に立ち上がる。6 A段階に属し、12世紀末葉の所産とみられる。16は白磁碗の口縁部である。口径は17.3cmで、玉縁口縁を呈する。胎土は微細な黒斑を含む白色で、釉薬はやや黄みがかかった白である。12世紀後半に属する。

（3）第3面

石敷114（図23、図版20－1・2）

17は須恵器の杯B蓋である。口径15.9cm、器高2.8cm。天井部は盛り上がり、宝珠形のつまみが付く。稜の部分に円弧状の墨書が認められる。9世紀に比定される。18は熨斗瓦である。平瓦を縦に半截したもので、厚さ2.5cmを測る。凸面は斜格子タタキ後ケズリ、凹面は布目が残存する。9世紀から11世紀以前の所産か。

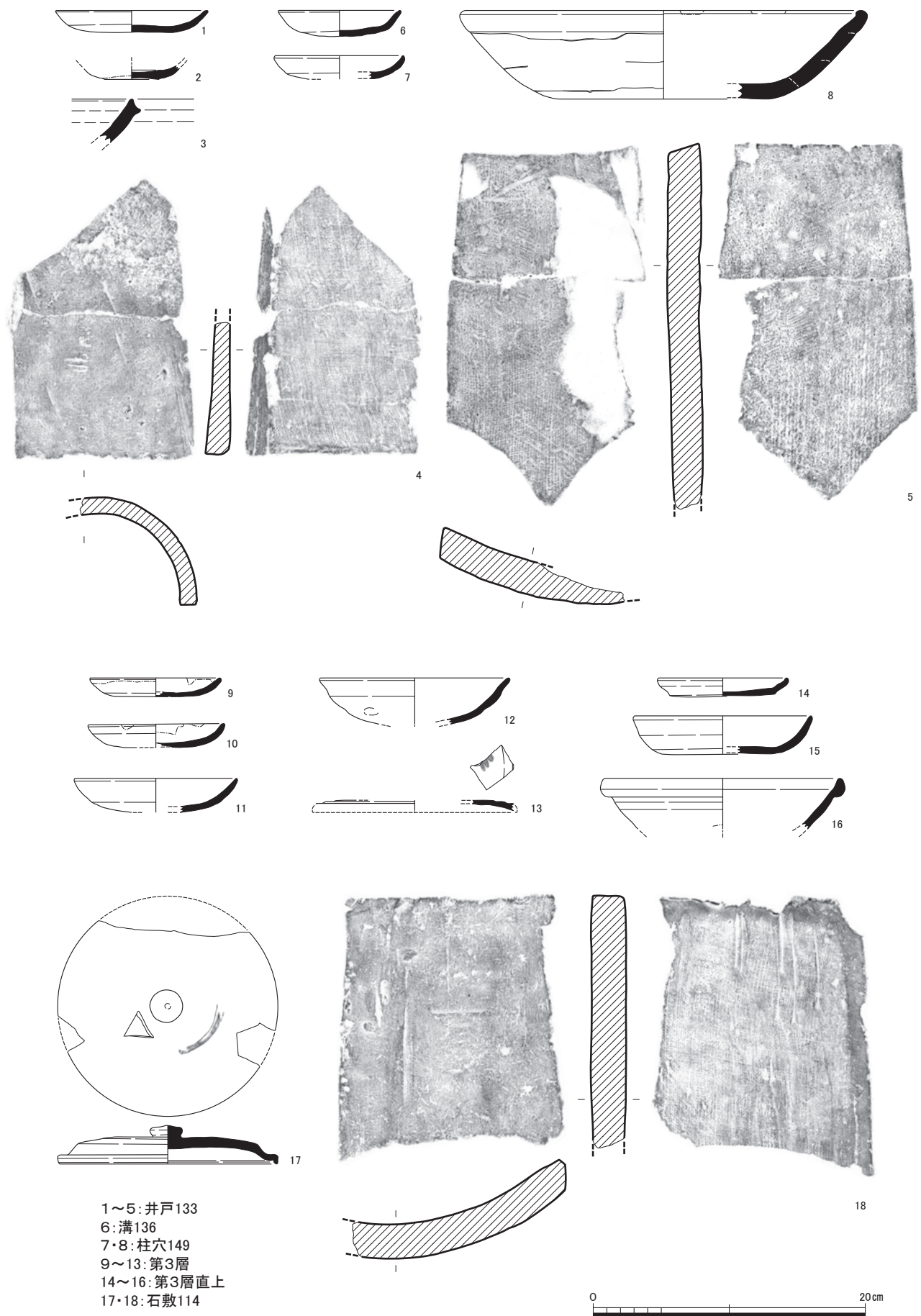


図23 出土遺物1 (1 : 4)

瓦列101（図24、図版20－3・4）

19・20は瓦列として敷かれていた平瓦及び熨斗瓦である。19－1・2は完形の平瓦を縦に半截した熨斗瓦である。焼成前の割を想定した切込みは認められず、現地で割ってつくられたものとみられる。元の平瓦は長さ37.2cm、幅27.5cm、厚さ2.5cmを測る。凸面は調整をナデ消すが、凹面は布目が残存する。20は平瓦である。長さ35.8cm、残存幅26.7cm、厚さ2.2cmで、凸面は縄目、凹面は布目が認められる。縄タタキは全て側縁に平行して密に施されており、縄の幅は3.5mmを測る。凹面に離れ砂とみられる2.0mm前後の白色鉱物が多く付着する。いずれも9世紀から11世紀以前の所産とみられる。なお、瓦列を構成する瓦の内訳として、平瓦が5点、熨斗瓦が10点認められた。

柱列2（図25、図版21－1）

21・22は土師器の皿Nである。21は口径9.0cm、器高1.6cmを測る。口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出する。6 A段階に属し、12世紀末葉の所産とみられる。22は口径8.8cm、器高1.8cmで、口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出する。6 B段階に属し、13世紀初頭に比定される。23は瓦質土器盤の口縁部である。内面にミガキが施される。楠葉型のB類で、12世紀後半のものと考えられる。21は柱穴103、22は柱穴106、23は柱穴104より出土した。

柱列3（図25、図版21－1）

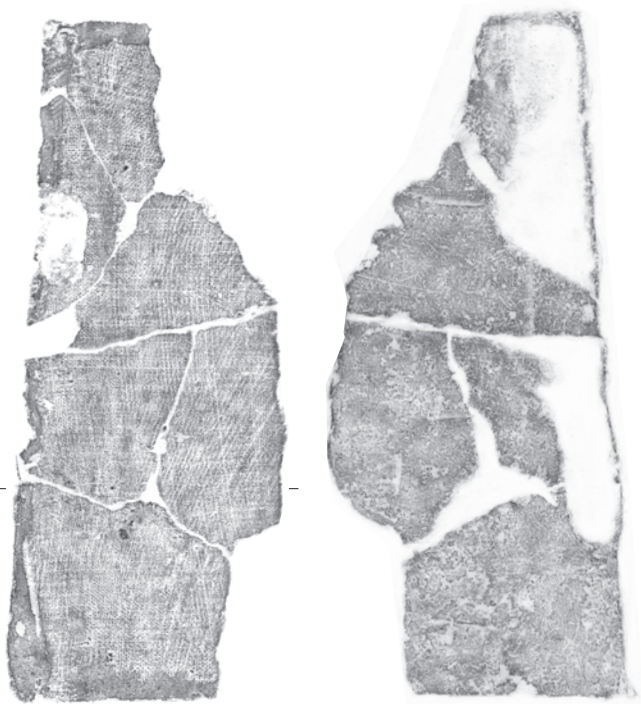
24は瓦質土器盤の口縁部である。口径37.8cmで、口縁端部は外方に突出し、内面にミガキは認められない。内外面に油煙痕が帯状に付着する。楠葉型のB類で、12世紀末葉に比定される。25は白色土器の蓋の宝珠部分である。26は陰刻剣頭文軒平瓦である。瓦当厚は3.4cmを測る。瓦当成形は折り曲げづくりで、平瓦部凹面には布目が残存する。山城産で、12世紀後半に属する。いずれも柱穴109より出土した。

柱穴117（図25）

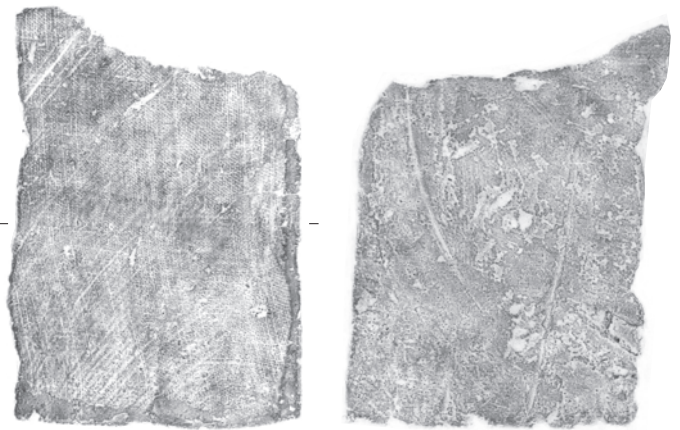
27は土師器の皿Nである。口径8.9cm、器高1.6cmで、口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部に向かって直線的に立ち上がる。6 B段階に属し、13世紀初頭に比定される。

溝116（図25、図版21－2）

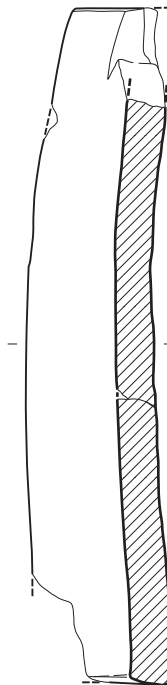
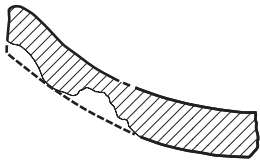
28・29は土師器の皿Nである。28は口径8.6cm、器高1.2cm、29は口径9.0cm、器高1.5cmを測る。口縁部には2段ナデが施され、口縁端部は上方に突出して仕上げられる。5 B段階に属し、12世紀中葉から後葉に比定される。30は瓦質土器盤の口縁部である。やや薄手で、口縁端部は外方に突出し、内面にミガキが施される。楠葉産で、12世紀後半に属する。31・32は白色土器である。31は蓋の宝珠部分である。32は皿の底部で、底面に回転糸切痕を残す。底径は5.4cmを測る。12世紀後半の所産とみられる。33・34は白磁碗の口縁部である。33は口径15.6cmで、玉縁口縁を呈する。



19-1



19-2



20

19-20: 瓦列101

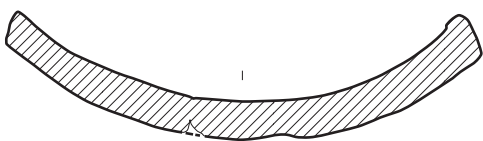
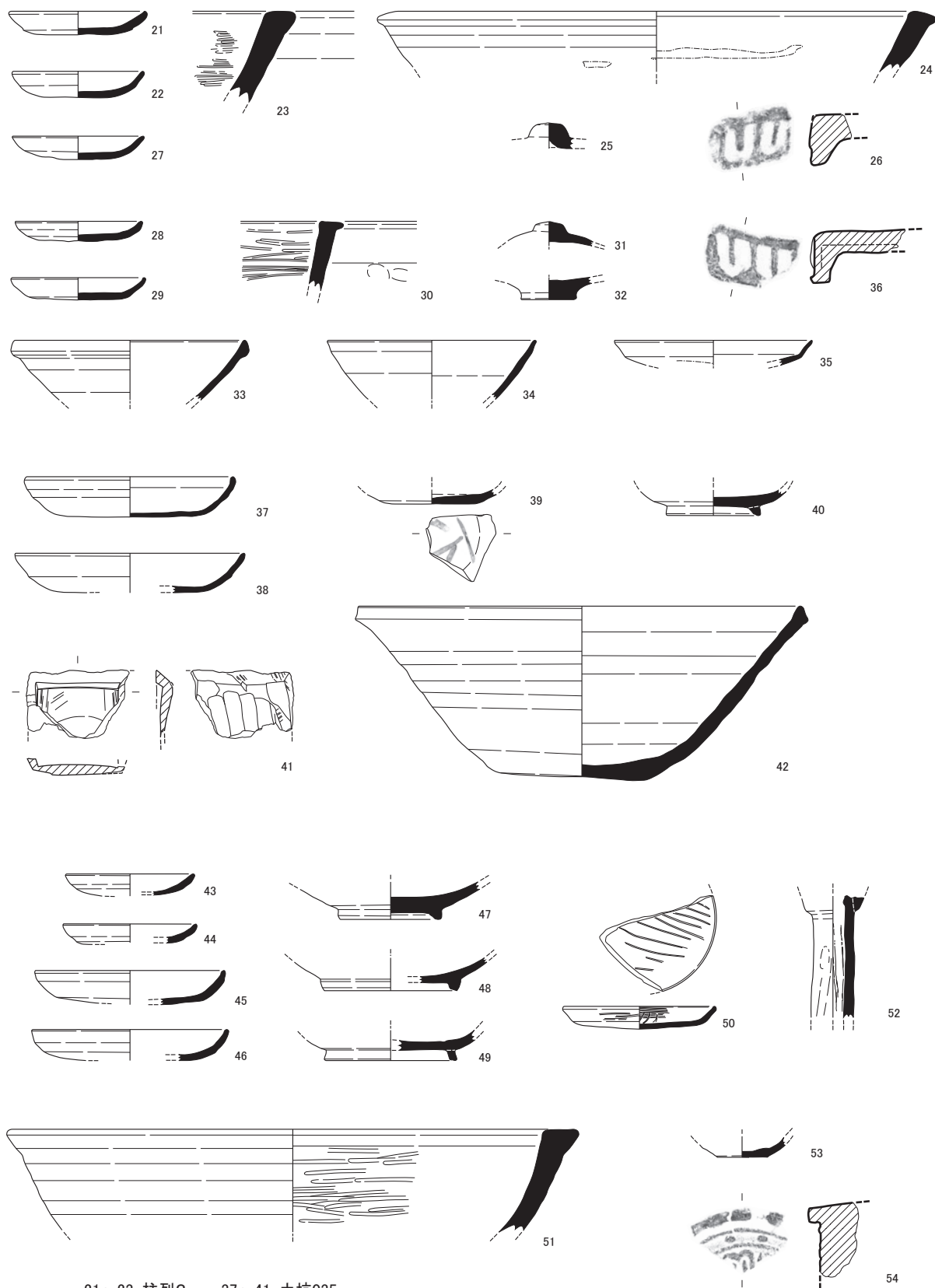


图24 出土遺物2 (1 : 4)



21~23: 柱列2
 24~26: 柱列3
 27: 柱穴117
 28~36: 溝116
 37~41: 土坑035
 42: 土坑037
 43~52: 第2層
 53・54: 第2層直上

0 20cm

図25 出土遺物3 (1:4)

34が口径14.2cmで、口縁端部がわずかに外反する。胎土はいずれも微細な黒斑を含む白色で、釉薬はやや黄みがかった白である。12世紀後半に属する。35は輸入陶器の皿である。口径15.6cmで、内面及び体部外面に黄釉が施釉される。胎土は緻密である。11世紀後半から12世紀前半の所産か。36は陰刻剣頭文軒平瓦である。瓦当厚は3.4cmを測る。瓦当成形は折り曲げづくりで、平瓦部凹面には布目、瓦当裏面から平瓦部凸面にかけては縄タタキが残る。山城産で、12世紀後半に属する。28・31～34・36は上層、29・30は下層より出土した。

土坑035（図25、図版22－1）

37・38は土師器の皿Nである。37は口径14.2cm、器高2.7cmを測る。口縁部には2段ナデが施され、口縁端部は直立する。5 A段階に属し、12世紀前葉に比定される。38は口径15.6cm、残存器高2.6cmで、口縁部には2段ナデが施され、口縁端部は上方に突出して仕上げられる。5 B段階に属し、12世紀中葉から後葉のものと考えられる。39は須恵器杯Aの底部である。底径6.4cmで、底面に「下」の文字に似た墨書が認められるが、全容は不明である。40は緑釉陶器碗の底部である。貼付高台で、底部外面には糸切痕が残る。高台径は3.3cmを測る。釉薬は明緑灰色で、ハケによって全面施釉されている。胎土は硬質である。猿投産か。9世紀に属する。41は石製の長方形硯である。粘板岩製。12世紀以降の所産とみられる。

土坑037（図25、図版22－2）

42は東播系須恵器の鉢である。口径29.9cm、底径10.1cm、器高11.9cmを測る。体部から口縁部にかけて外方に向かって直線的に立ち上がり、口縁端部は外方に拡張する。Ⅱ-2類に該当し、12世紀後半に比定される。

（4）第2層・第2層直上

第2層（図25、図版23－1）

43～46は土師器の皿Nである。43・44は小型品で、口径8.8～9.0cm、45・46は大型品で、口径12.8～13.2cmを測る。いずれも口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出する。6 B段階に属し、13世紀初頭に比定される。47～49は緑釉陶器碗の底部である。47の底径は6.9cm、48・49の底径は9.0cmを測る。47・48は削り出し高台、49は貼付高台である。釉薬は淡い青緑色～オリーブ黄色で、いずれもハケによって全面施釉されている。胎土は、47・49が軟質、48が硬質となる。47・48は京都産、49は猿投産とみられる。9世紀の所産と考えられる。50は瓦器皿である。口径10.2cm、器高1.5cmを測る。内面見込みに暗文が施されるが、粗い。12世紀後半のものと推測される。51は瓦質土器盤の口縁部である。口径39.8cmで、体部から口縁部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は外方に突出する。内面にはミガキが施される。楠葉型のB類で、12世紀後半に比定される。52は白色土器の高杯脚柱部である。心棒作りで、表面に面取りが施される。12世紀後半の所産とみられる。

第2層直上（図25、図版23－1）

53は土師器の皿D⁽¹⁾である。底面に回転糸切痕が認められる。底径3.4cm。12世紀代に属する。54は複弁蓮華文軒丸瓦である。外区には楕円状の珠文が周る。胎土に白色鉱物を多く含む。山城産で、12世紀代の所産とみられる。

（5）第2面

建物1（図26、図版23－2）

55～59は土師器の皿Nである。55～57は小型品で、口径8.6～9.2cm、58・59は大型品で、口径13.0～15.6cmを測る。55～57・59においては口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出するが、58は口縁部に2段ナデが施される。6Aから6B段階に属し、12世紀末葉から13世紀初頭に比定される。60は白色土器の皿である。口径9.3cm、底径4.0cm、器高2.3cmで、底面に回転糸切痕を残す。12世紀後半の所産とみられる。61・62は軒丸瓦である。61は単弁八弁蓮華文か。中房部分は欠損しているが、その周囲には葦が周っていたものとみられる。胎土に白色鉱物を多く含む。円勝寺跡⁽²⁾などで同文のものが出土している。山城産で、12世紀後半に属する。62は単弁蓮華文である。中房に蓮子が認められる。山城産で、12世紀代のものと推測される。55・56・59・60は柱穴083、57・62は柱穴090、58は柱穴082、61は柱穴025より出土した。63は柱穴078で認められた柱材である。一辺15.7～17.0cmの角材で、ヒノキ材が用いられている。

土坑076（図26、図版24－1）

64～67は土師器の皿Nである。64・65は小型品で、口径9.0～9.2cm、66・67は大型品で、口径12.8～14.6cmを測る。64・65・67においては口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出するが、66は口縁部に2段ナデが施される。6Aから6B段階に属し、12世紀末葉から13世紀初頭に比定される。68は東播系須恵器鉢の口縁部である。口径28.8cmで、体部から口縁部に向かって直線的に立ち上がり、口縁端部が上方にわずかに突出する。Ⅱ-1類に属し、12世紀後半の所産か。69は瓦質土器盤の口縁部である。体部から口縁部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は外方に突出する。内面にはミガキが施される。楠葉型のB類で、12世紀後半に比定される。70・71は白色土器皿の底部である。いずれも底径は4.0cmで、糸切痕が認められる。12世紀後半のものと推測される。72・73は白磁である。72は合子の蓋である。カエリ付きの蓋で、外面天井部には文様は認められないが、内面には花卉状に折り曲げられた粘土塊が貼り付けられる。薄手で、胎土・釉薬とも白色を呈する。景德鎮窯の初期青白磁か。12世紀後半に属する。73は碗の口縁部で、口径14.8cmを測る。口縁端部が外方に向かって水平に折れ、嘴状を呈する。胎土はいずれも微細な黒斑を含む白色で、釉薬はやや黄みがかった白である。12世紀後半に属する。

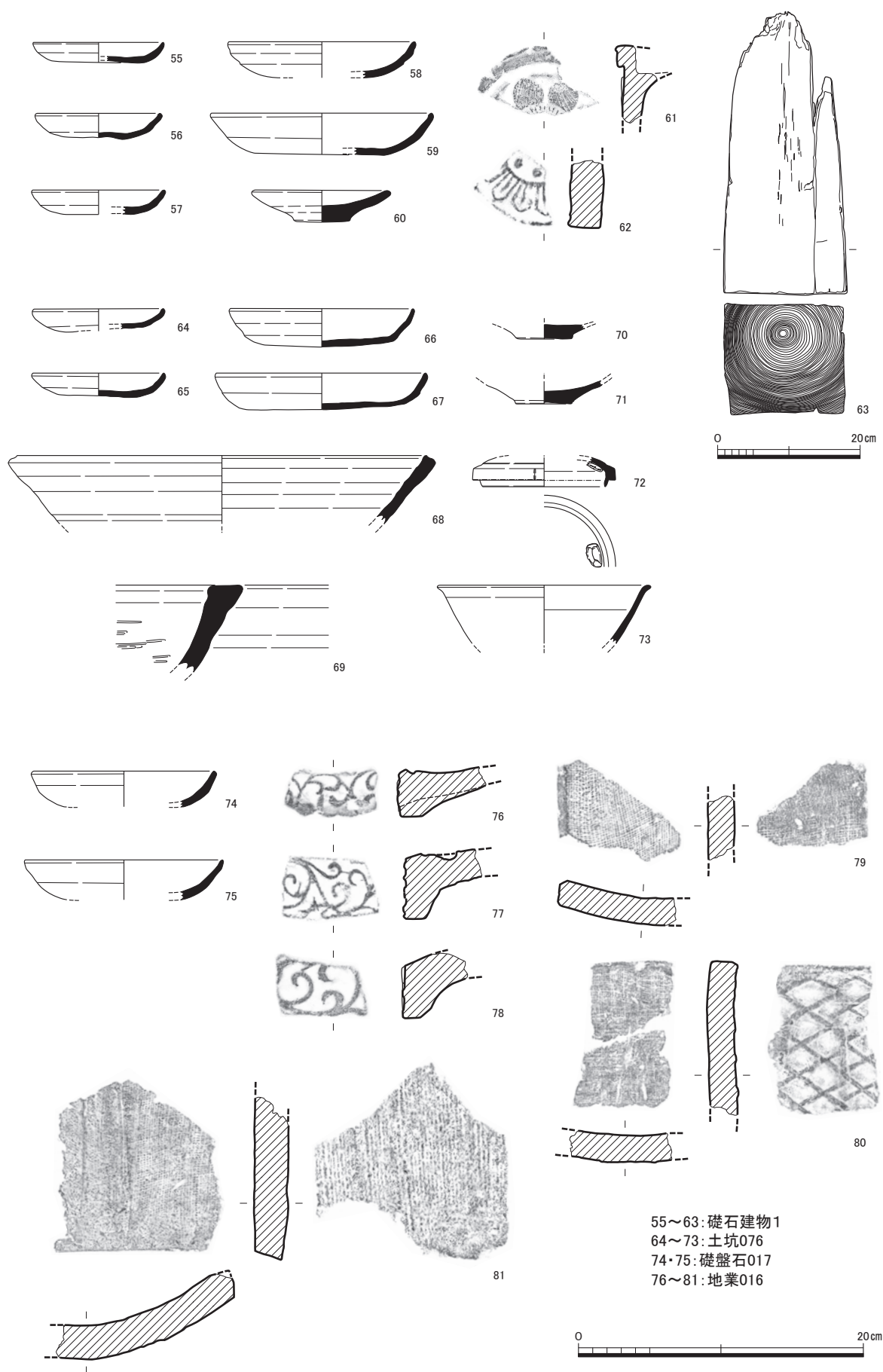


図26 出土遺物4 (1:4、1:8)

礎盤石017 (図26)

74・75は土師器の皿Nである。いずれも大型品で、74は口径12.6cm、残存器高2.5cm、75は口径13.8cm、残存器高2.8cm。口縁部のヨコナデ調整が1段ナデ化しており、口縁端部は上方に突出する。6B段階に属し、13世紀初頭に比定される。

地業016 (図26、図版24-2)

76～78は唐草文軒平瓦である。瓦当厚は3.3～4.3cmで、いずれも外区・周縁は認められない。瓦当成形は76が顎貼付式、77・78が折り曲げづくりである。76・77には平瓦部凹面に布目が認められた。77は胎土に2.0～4.0mmの白色鉾物を多く含む。山城産で、12世紀代の所産と推測される。79・80は平瓦である。79は凹凸面にて布目が認められ、両面で布目の方向が異なる。色調は浅黄色を呈し、胎土に2.0～8.0mmの白色・黒色・赤色鉾物を多く含む。厚さは1.9cmを測る。25の調査においても同様の平瓦が出土している。80は凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が認められる。色調は灰黄色で、胎土に2.0～3.0mmの白色・黒色鉾物を多く含む。厚さは2.2cmを測る。山城産で、12世紀代の所産とみられる。81は平瓦を縦に半截した熨斗瓦である。凸面に幅3.0mmの縄目、凹面に布目が認められ、縄タタキは全て側縁に平行して密に施されている。凸面には離れ砂とみられる2.0mmの白色鉾物が多く付着する。9世紀から11世紀以前に比定される。

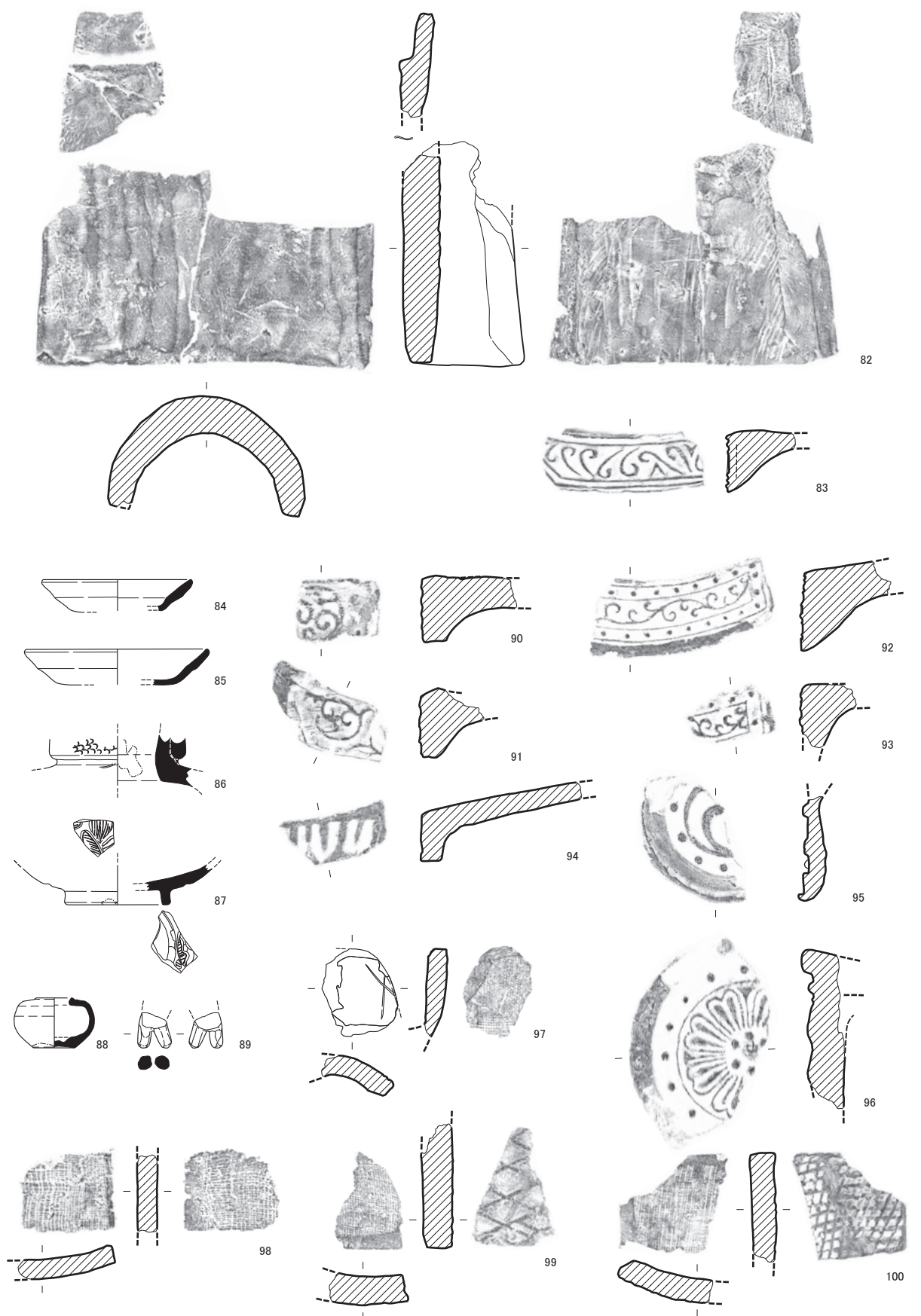
瓦列018 (図27、図版24-2)

82は丸瓦である。丸瓦部凸面にはケズリ、凹面には布目タタキのちユビオサエをし、端部のみケズリが施される。玉縁部は凸面に粘土を貼り付ける際に突帯状につくられ、玉縁部より下位は凸面に縄タタキのちナデ、凹面には布目が認められる。83は唐草文軒平瓦である。瓦当厚は3.9cmを測る。簡略化された唐草文を配し、外区に二重の界線が周る。瓦当成形は折り曲げづくりで、胎土は精良で砂粒を含まない。19の調査にて同文とみられる瓦⁽³⁾が出土している。

(6) 第1層

第1層 (図27、図版25-1～3)

84・85は土師器の皿Nである。84は口径10.4cm、85は口径12.6cmを測る。いずれも口縁立ち上がり部が強く屈曲し、口縁部が肥厚する。7Cから8A段階に属し、14世紀中葉から後葉に比定される。86・87は青磁である。86は明代青磁の壺の頸部で、陰刻された鱗文様を持つ龍が頸部に巻きつく。釉薬は明緑灰色を呈する。16世紀から17世紀の所産か。87は初期高麗青磁の底部である。高めの高台を持ち、高台脇には陰刻された草花文が密に施文される。砥石の目跡が高台に1ヶ所認められる。高台径は7.2cmを測る。全面施釉されており、釉色は緑灰色である。承盤の底部か。12世紀前半に属する。88は古瀬戸の合子である。口径2.6cm、底径3.0cm、器高3.5cm。無文で、底面には糸切後のヘラケズリ痕が残る。底面以外全面に灰釉がハケ塗りで施釉される。12世紀末葉から13世紀初頭に該当する。89は犬形土人形の脚部である。16世紀から17世紀の所産とみられる。90～94は軒平瓦である。90～93は唐草文である。90は内行唐草文である。瓦当厚は4.5cmで、



82・83: 瓦列018
84~100: 第1層

図27 出土遺物5 (1 : 4)

胎土に白色・黒色鉱物を多く含む。円勝寺や法勝寺などで同文とみられる瓦⁽⁴⁾が出土している。山城産で、12世紀初頭に属する。91は右偏行唐草文である。瓦当厚は4.3cmで、平瓦部凹面に布目が認められる。27の調査にて同文の瓦⁽⁵⁾が出土している。山城産で、12世紀前葉に属する。92は左偏行唐草文である。外区は界線で区切られ、密な珠文が配される。瓦当厚は5.0cmを測る。瓦当成形は顎貼付式で、平瓦部凹面には布目が残る。胎土には白色鉱物を多く含む。19の調査で検出された四条大路北築地内溝より同文とみられる瓦⁽⁶⁾が出土している。山城産で、12世紀代のものか。93は92と同文の瓦である。瓦当成形は折り曲げづくりで、平瓦部凹面には布目が残る。胎土に白色鉱物を多く含む。94は陰刻剣頭文である。瓦当厚は3.2cmを測る。瓦当成形は折り曲げづくりで、平瓦部凹面には糸切り痕が残る。山城産で、12世紀後半に属する。95・96は軒丸瓦である。95は右卷三巴文で、外区には珠文が配される。焼成不良品で、范の大きさが合わず、周縁端部に段が形成されている。12世紀代のものか。96は複弁八弁蓮華文である。中房には6個の蓮子を配し、中央には「栗」銘が認められるが摩滅している。外区に珠文を配し、圈線によって内外区を画する。栗栖野瓦窯産で、9世紀後半の所産である。97は丸瓦の玉縁部である。凸面にて「×」のヘラ記号、凹面にて布目が認められる。色調は灰白色である。98～100は平瓦である。98は凹凸面にて布目があり、両面で布目の方向が異なる。色調は灰白色を呈し、胎土に1.0～2.5mmの白色鉱物を多く含む。厚さは1.5cmを測る。99は凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が認められる。色調は黒色で、硬質化している。2.0～5.0mmの白色鉱物を多く含む。厚さは2.2cmを測る。山城産で、12世紀代の所産とみられる。100は凸面に斜格子タタキ、凹面に布目が認められる。色調は浅黄橙色を呈する。山城産で、12世紀代のものか。

(7) 第1面

土坑064 (図28、図版25-4)

101・102は白磁の碗である。101は口縁部で、口径は16.2cmを測る。口縁は玉縁状を呈し、内面見込みに沈線が施される。胎土は微細な黒斑を多く含む白色で、釉薬はやや黄みがかかった白である。12世紀後半に属する。102は底部である。高めの高台を持ち、高台径は5.3cmを測る。胎土は陶質で、釉薬は浅黄色を呈する。11世紀後半から12世紀前半の所産とみられる。103は瓦質土器の火鉢である。口径20.8cmで、体部から口縁部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁端部は平坦に仕上げられる。粘土紐を上積みし、ナデによってつなぎ合わせる。14世紀代のものか。

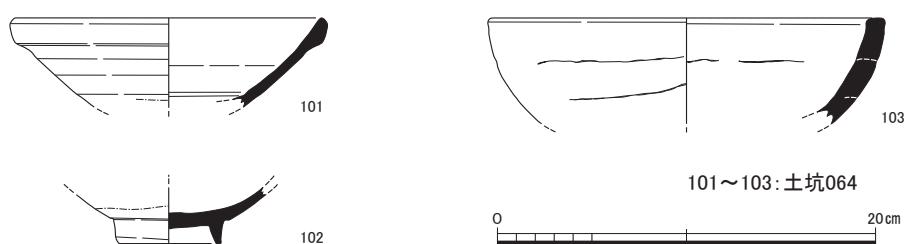


図28 出土遺物6 (1:4)

註

- (1) 中井淳史分類(「第1章 土師器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 2022年)による。
- (2) 瓦37(近藤奈央・上村和直・松吉祐希『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』2015-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年)及び瓦75(柏田由香・上村和直『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』2017-16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年)
- (3) 075(村尾政人『平安京跡(左京四条一坊四町)発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書3 西近畿文化財調査研究所 2001年)
- (4) 瓦140(近藤奈央・上村和直・松吉祐希『円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡』2015-17 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年)及び13-2(上原真人・木村捷三郎・畑美樹徳「京都市動物園爬虫類館建設に伴う“法勝寺”発掘調査報告」『法勝寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課 1975年)
- (5) 瓦29・30(松吉祐希『平安京左京四条一坊五町跡』20246 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2025年)
- (6) 108(村尾政人『平安京跡(左京四条一坊四町)発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書3 西近畿文化財調査研究所 2001年)

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、平安京左京四条一坊四町の南東部にて、平安時代末期から鎌倉時代初頭の間に3時期の変遷を重ねる遺構群と、安土・桃山時代以降の遺構群を検出した。当町は11世紀末葉から12世紀初頭の公卿である源国信の邸宅地とされているが、平安時代後期以前の遺構は認められなかった。以下、これまでの記述と重複するところもあるが、遺構の変遷と評価について、周辺の調査成果も併せながら検討を行う。なお、本文中で述べる調査地を示す調査番号は図6・表1に対応する。

1 遺構の変遷

(1) 平安時代末期から鎌倉時代初頭(図29)

当地では、平安時代末期から鎌倉時代初頭において3時期にわたる遺構の変遷が認められ、整地を伴う宅地の改変が2度行われていることが判明した。以下では、当該期の遺構の変遷について、検出面(第2～4面)ごとに分けて説明する。出土遺物からは、第2～4面の遺構群と、当該面の整地層である第2・3層はいずれも平安京土師器編年の6A～6B段階(12世紀末葉から13世紀初頭)の範疇に収まるが、第4面の遺構群は6B段階(13世紀初頭)の遺物を伴わなかった。

第4面 Y=-23,353以東でのみ分布する第3層の下にて、井戸133、溝136、柱穴149を含む柱穴群を検出した。いずれも調査区東側に集中して分布する。井戸133は一辺約0.7mを測る方形縦板組横棧留型の本組井戸で、底部のみ残存していた。井戸133は南北方向の溝136の北端を切って構築されるが、溝136との相関関係は不明である。両者は坊城小路西築地心より約12m(40尺)西側の位置に設けられており、この位置は第2・3面の遺構においても踏襲して意識されている。これより東側に柱穴群を検出したが、建物や柵列としての復元は出来なかった。

第3面 地業100、瓦列101、石敷113・114、柱列1～4、土坑037、溝057・116などを検出した。溝057・116は周辺調査にて検出された四条大路北築地内溝の延長部に位置することから、四条大路北築地内溝と推測される(図30)が、他の地点の四条大路北築地内溝は平安時代後期に埋没しており、時期差を考慮する必要がある。調査区東側にて検出した瓦列101、石敷113・114、柱列3は一連のものと考えられる。柱列3は2間分のみ認められ、柱間は0.9m(3尺)等間、柱穴は径0.5～0.75mを呈する。四条大路北築地心より約7.5m(25尺)北に位置しており、この遺構を中軸として北側には瓦列101、南側には石敷113・114が配される。瓦列101と石敷113の心々距離は1.8m(6尺)を測る。瓦列101で敷かれていた瓦は熨斗瓦及び平瓦のみが用いられており、軒瓦や丸瓦は認められなかった。この一連の遺構群は坊城小路西築地心より約12m(40尺)西側の位置にて止まり、第4面よりプランが踏襲されている。この遺構群について、大型の塀状遺構の可能性も考えられるが、四条大路北築地内溝で区切られた宅地内に築かれたものであるため、四条大路の北築

地堀（坊城）とは結び付けがたい。また、四条大路北築地内溝と平行するため、門跡とも考えにくい。よって、これらの遺構群について明確な性格を断言することは出来ないが、条坊に接する宅地関連遺構であったと想定される。地業100は湿地状堆積上に構築されていることから、第2面で検出した地業016と同じく沈下防止を目的としたものと推測されるが、用いられた瓦が地業016より軟質で鉾物を含まず、平安時代後期より前の所産とみられる。一連の柵列と想定される柱列1・2は、東西方向に16.3m（54.3尺）分検出した。いずれも3間分検出し、柱列1は柱間が0.5m（1.7尺）～2.9m（9.6尺）と不均等だが、柱列2は約0.8m（2.7尺）等間である。柱穴は径0.3～0.45mを測る。柱列1より約1.4m（4.6尺）北側には土器埋納遺構である土坑037が位置する。柱列1・2が境界施設である可能性を考慮すると、土地境界に関連する祭祀遺構と想定される。

第2面 建物1とそれに付随する区画溝022、土坑076、地業016、瓦列018、礎盤石017を検出した。建物1は東西3間（10m）、南北2間（3.6m）以上の総柱建物で、東西の柱間は1.5m（5尺）～3.6m（12尺）、南北の柱間は1.6m（5.3尺）～1.8m（6尺）を測る。柱穴の平面形は直径0.3～0.7mの円形を呈し、柱穴025・078・090は地下式礎石、柱穴081・082・083は根石、柱穴080・091は柱を固定するための板材を有する。建物の南辺は四条大路北築地心より約7.5m（25尺）北の位置で配されており、柱穴091・080・083の列は第3・4面よりプランを踏襲し、坊城小路西築地心より約12m（40尺）西側に位置する。建物の南辺である柱穴081・082とその東延長部にある土坑076は破碎された土師器皿片を多量に含む土で埋め戻されていた。建物の西辺より1.8m（6尺）西には南北方向の溝022が設けられ、坊城小路西築地心からの距離は約20m（66.6尺）を測る。この溝を境として西側では湿地状堆積が分布し、その上に地業016や瓦列018が構築されていることから、宅地を東西に区画する溝と推測される。地業016は地業100と同じく湿地状堆積上に構築されるが、用いられた瓦が地業100より硬質で鉾物を含んでいるものが多く、平安時代後期の所産とみられる。瓦列018より南側には地業016は分布しないため、瓦列018が境界の役割を果たしていた可能性がある。

以上を通観すると、当地では平安時代末期から鎌倉時代初頭の間に、3段階にわたって宅地の再整備が行われた。1段階目（第4面）においては井戸や溝、柱穴群が認められ、宅地利用が存在したことは窺えるが、利用の実態は不明な点が多い。2段階目（第3面）では条坊関連遺構や宅地内の境界施設などが構築されるが、3段階目（第2面）になると条坊関連遺構は埋め立てられ、宅地の南東隅に地下式礎石・根石を伴う掘立柱建物が建てられる。この建物は重量のある上部構造を持っていたと考えられることから、当該面の成立期にも高位貴族層の邸宅が当町に存在していた可能性が推測される。建物の性格として、仏堂の可能性も否定できないが、庇を持たない点や建物下に地業を伴わない点を考慮すると積極的に評価するのは難しい。貴族の住居や倉庫（蔵）として利用されたものと推測される。

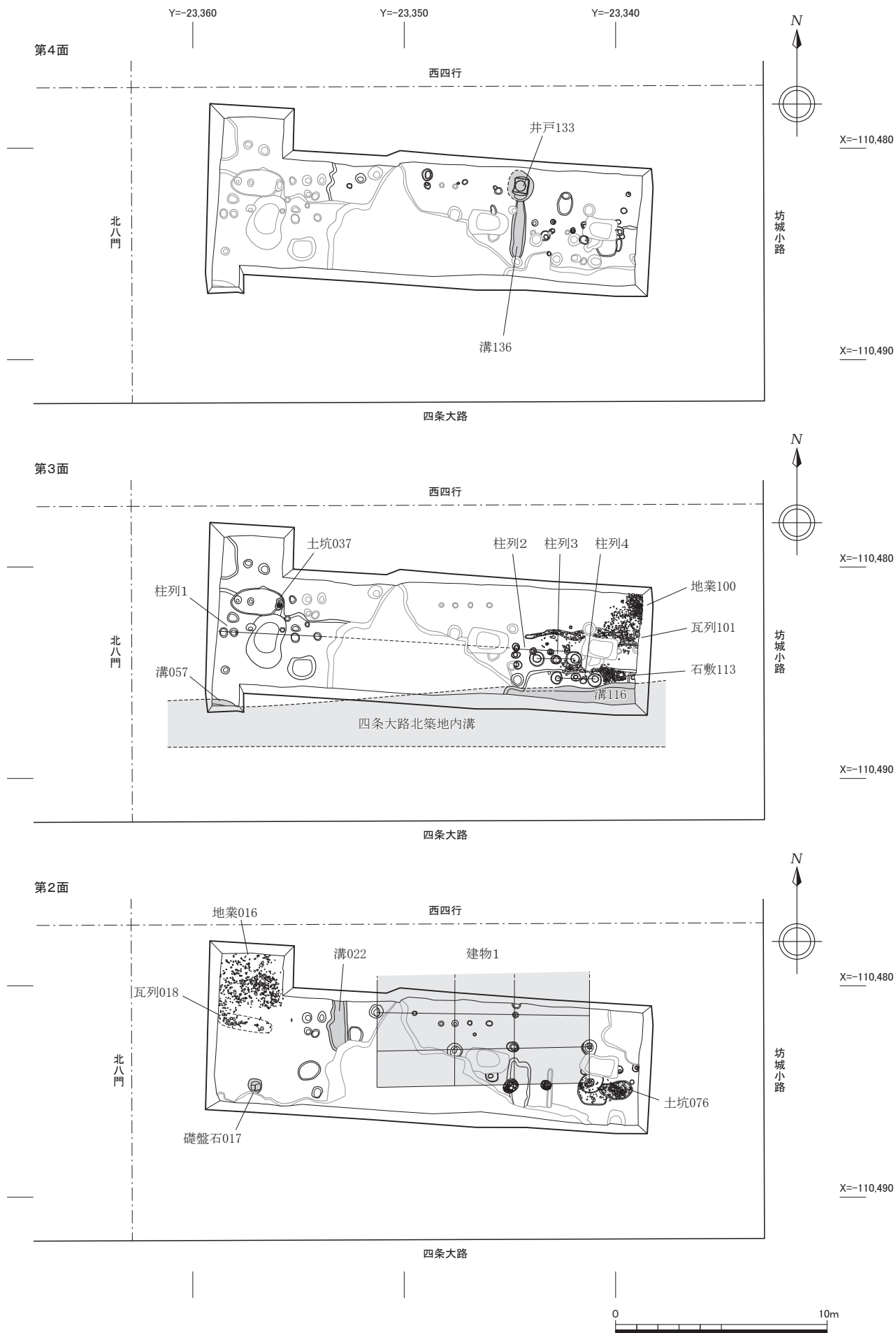


図29 平安時代末期～鎌倉時代初頭遺構変遷図 (1 : 250)

のが9割以上を占めた。丸・平瓦及び熨斗瓦などは詳細な生産時期を特定するのが困難であるものの、成形及び調整手法の特徴から以下の時期に区分することができる。すなわち、丸瓦が平安時代後期、平瓦は平安時代前期から中期と後期、熨斗瓦及び面戸瓦が平安時代前期から中期に属するものと推測される。出土点数からみると、平安時代後期から鎌倉時代初頭に生産されたものが29点のうち22点と多い。以上から、当調査で出土した瓦類は平安時代後期から鎌倉時代初頭に属するものが主体であり、検出遺構の所属時期とも一致する。一方で、平安時代前期から中期に比定した熨斗瓦・平瓦は地業100・瓦列101よりまとまって出土しており、同じ建物（施設）に葺かれていたものが再利用されたと推測される。しかし、今回の調査を含めた当地周辺の調査ではこれまでに平安時代前期の瓦葺建物は確認されていない。また、用いられた瓦の出土比率は平瓦より熨斗瓦の比率が高い。この点について、屋根の広範囲を覆う平瓦が棟のみ使用される熨斗瓦より少ないということは、これらの瓦が屋根の面積が狭い（棟から軒先までの距離が短い）施設に葺かれていたと考えることができる。また、当該期の軒瓦が出土していないことを踏まえると、葺棟瓦であったと想定しにくい。以上から、これらの遺構で用いられた瓦は築地の瓦であったと推測される。当該遺構が坊城小路西築地に近接して検出している点においても、この推定を補強する。なお、軒瓦のない築地跡は、調査地と同じ「坊城」域にあたる平安京右京七条一坊七町跡においても確認されている⁽¹⁾。

平安時代後期から鎌倉時代初頭における左京四条一坊四町の条坊関連遺構について、周辺の調査成果と併せて検討すると、調査区南東部よりすぐ南側の地点にて行われた調査（24）にて、四条大路北側溝の埋土と想定される湿地状堆積内から木組遺構が見つかり、当調査区の南東側にて四条大路北築地内溝と北築地内溝を繋ぐ暗渠が通っていた可能性がある。今回の調査にて検出された塀状遺構及び地業の性格に関しても、坊城小路西築地内溝との相関関係によって解明されることが考えられる。ただし、当該遺構は四町内にて現在未検出であり、今後の調査成果によりその存在が確認されることが期待される。

（2）安土・桃山時代以降

鎌倉時代後半以降、当地において顕著な遺構は認められなくなるが、第1層及び第1面の遺構より南北朝期から安土・桃山時代の遺物が出土していることから、その時期に土地利用が再開することが窺える。第2面の遺構群が廃絶した後、調査地では再び整地が行われ、その上に第1面の遺構群が成立する。第1面では石列1、素掘り溝群、土坑064を検出した。石列1は素掘り溝群の下にて認められ、扁平な束石が東西方向に並び、その南側には炭化物層が分布する。束石による小規模な建物が建てられたと推測される。建物の廃絶後は素掘り溝群と土坑以外に遺構は認められなくなる。耕作地として利用された可能性が高い。

2 平安時代末期から鎌倉時代初頭における邸宅の所有者について

『拾芥抄』東京図によると、左京四条一坊四町は11世紀末から12世紀初頭の公卿である源国信の邸宅が所在したとされる。国信は「坊城中納言」と号したともいわれており、己の邸宅地である当町が「坊城」に属することを強く意識していた様子が窺える。

今回の調査では、源国信が存命していた平安時代後期の遺構は認められず、平安時代末期から鎌倉時代初頭の遺構群を検出した。特に、坊城小路西築地の築地塀に使用されていた瓦を転用して構築された瓦列と石敷を伴う塀状遺構や礎石を備えた堅固な構造の建物が認められたことを踏まえると、依然として高位貴族の居住地であった可能性が高い。出土遺物においても白色土器や輸入磁器が一定量認められており、当地が一定の階層に属する居住域であったことを裏づける。このことから、邸宅地は源国信の子孫に受け継がれていた可能性が想定される。当該期で該当するのが、国信の孫、信時の子である源顕信で、国信と同じく「坊城」を号していた。顕信は安元二（1176）年に治部卿、安元三（1177）年には正四位下に叙され、寿永二（1183）年になると従三位として公卿に列する。建久二（1192）年になると正三位に昇叙されるが、翌年には出家している。また、播磨国や美作国の国司も兼任していた⁽²⁾。この時期は今回検出された遺構群の所属時期と重なる。史料が少ないため詳細は不明だが、顕信が公卿に叙された段階において短期間のうちに邸宅地の改変が3度行われた可能性がある。

註

- （1）東 洋一・柏田由香『平安京右京七条一坊七町跡』2016-2 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- （2）『公卿補任』による。

参考文献

- 家崎孝治「Ⅱ 左京四条一坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 上原真人『瓦を読む』歴史発掘11 株式会社講談社 1997年
- 村尾政人『平安京跡（左京四条一坊四町）発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書3 西近畿文化財調査研究所 2001年
- 吉村正親「平安京坊城地について」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第6号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 吉本健吾「3 平安京左京四条一坊四町（06HL482）」『京都市内遺跡立会調査報告平成19年度』京都市文化市民局 2008年

表 4 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿	東区	F-2	井戸 133	11.0	1.6	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
2	白磁	皿	東区	F-2	井戸 133	-	(1.0)	4.0	(胎) 5Y8/1 灰白色 (釉) 5Y7/2 灰白色	
3	須恵器	鉢	東区	F-2	井戸 133	-	(3.2)	-	N 5/0 灰色	東播系
4	瓦	面戸瓦	東区	F-2	井戸 133	長 (20.9)	幅 (11.3)	高 (4.0)	2.5Y6/2 灰黄色	丸瓦を縦に半載
5	瓦	戩斗瓦	東区	F-2	井戸 133	長 (26.9)	幅 (14.1)	厚 2.4	10YR8/2 灰白色	平瓦を縦に半載
6	土師器	皿	東区	F-3	溝 136	9.0	1.9	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
7	土師器	皿	東区	H-2	柱穴 149	9.4	(1.7)	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿 N
8	土師器	盤	東区	H-2	柱穴 149	29.4	6.5	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	
9	土師器	皿	西区	B-2	第 3 層	9.5	1.4	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
10	土師器	皿	西区	C-2	第 3 層	10.1	1.4	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
11	土師器	皿	東区	F-1・2	第 3 層	11.8	(2.5)	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	皿 N
12	瓦器	椀	東区	F-1・2	第 3 層	13.8	(3.4)	-	(外) 10YR5/2 灰黄褐色 (内) 2.5Y6/2 灰黄色	和泉型
13	須恵器	蓋	東区	G-3	第 3 層	-	(0.8)	-	2.5Y7/1 灰白色	墨書
14	土師器	皿	東区	-	第 3 層直上	9.4	2.4	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
15	土師器	皿	東区	F・G-3	第 3 層直上	13.0	2.8	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
16	白磁	碗	東区	-	第 3 層直上	17.3	(3.7)	-	(胎) N 8/0 灰白色 (釉) 10Y7/2 灰白色	
17	須恵器	蓋	東区	G-3	石敷 114	15.9	2.8	-	2.5Y7/1 灰白色	墨書
18	瓦	戩斗瓦	東区	G-3	石敷 114	長 (20.8)	幅 (16.6)	厚 2.5	N 3/0 暗灰色	平瓦を縦に半載
19-1	瓦	戩斗瓦	東区	H-2	瓦列 101	長 37.2	幅 (15.0)	厚 2.4	N 6/0 灰色	完形平瓦を縦に半載 19-2 と同一個体
19-2	瓦	戩斗瓦	東区	H-2	瓦列 101	長 (21.9)	幅 15.1	厚 2.5	N 6/0 灰色	完形平瓦を縦に半載 19-1 と同一個体
20	瓦	平瓦	東区	H-2	瓦列 101	長 35.8	幅 (26.7)	厚 2.2	N 4/0 灰色	
21	土師器	皿	東区	G-3	柱列 2 (柱穴 103)	9.0	1.6	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
22	土師器	皿	東区	F-2・3	柱列 2 (柱穴 106)	8.8	1.8	-	10YR8/1 灰白色	皿 N
23	瓦質土器	盤	東区	F・G -2・3	柱列 2 (柱穴 104)	-	(6.2)	-	N 4/0 灰色	楠葉産
24	瓦質土器	盤	東区	G-3	柱列 3 (柱穴 109)	37.8	(4.1)	-	2.5Y5/1 黄灰色	楠葉産
25	白色土器	蓋	東区	G-3	柱列 3 (柱穴 109)	-	(1.7)	-	2.5Y8/2 灰白色	
26	瓦	軒平瓦	東区	G-3	柱列 3 (柱穴 109)	瓦当幅 (6.4)	瓦当厚 3.4	長 (2.9)	2.5Y7/1 灰白色	陰刻剣頭文
27	土師器	皿	東区	F-3	柱穴 117	8.9	1.6	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿 N
28	土師器	皿	東区	F-3	溝 116	8.6	1.2	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
29	土師器	皿	東区	G-3	溝 116	9.0	1.5	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
30	瓦質土器	盤	東区	G-3	溝 116	-	(4.7)	-	N 3/0 暗灰色	楠葉産
31	白色土器	蓋	東区	G-3	溝 116	-	(1.5)	-	10YR8/3 浅黄橙色	
32	白色土器	皿	東区	F-3	溝 116	-	(1.3)	5.4	10YR8/2 灰白色	
33	白磁	碗	東区	F-3	溝 116	15.6	(4.0)	-	(胎) 5Y8/1 灰白色 (釉) 5Y7/2 灰白色	
34	白磁	碗	東区	G-3	溝 116	14.2	(4.0)	-	(胎) N 8/0 灰白色 (釉) 7.5Y7/1 灰白色	

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
35	輸入陶器	皿	東区	H-3	溝 116	12.4	(1.7)	-	(胎) 2.5Y8/1 灰白色 (釉) 5Y8/3 淡黄色	
36	瓦	軒平瓦	東区	G-3	溝 116	瓦当幅 (6.3)	瓦当厚 3.4	長 (8.0)	7.5YR7/4 にぶい橙色	陰刻剣頭文
37	土師器	皿	西区	B-2・3	土坑 035	14.2	2.7	-	7.5YR7/6 橙色	皿 N
38	土師器	皿	西区	B-2・3	土坑 035	15.6	(2.6)	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
39	須恵器	杯	西区	B-2・3	土坑 035	-	(1.0)	6.4	N 8/0 灰白色	墨書
40	緑釉陶器	椀	西区	B-2・3	土坑 035	-	(1.7)	3.3	(胎) 10GY7/1 明緑灰色 (釉) 10Y6/2 オリーブ灰色	猿投産か
41	石製品	硯	西区	B-2・3	土坑 035	長 (4.7)	幅 (7.0)	厚 1.2	-	粘板岩製
42	須恵器	鉢	西区	B-2	土坑 037	29.9	11.9	10.1	N 7/0 灰白色	東播系
43	土師器	皿	西区	A・B -2・3	第2層	8.8	(1.5)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
44	土師器	皿	西区	A・B -2・3	第2層	9.0	(1.4)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	皿 N
45	土師器	皿	東区	G・H-3	第2層	12.8	(2.3)	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿 N
46	土師器	皿	東区	F-1・2	第2層	13.2	(2.1)	-	7.5YR8/4 浅黄橙色	皿 N
47	緑釉陶器	椀	東区	D-1・2	第2層	-	(2.5)	6.9	(胎) 2.5Y7/1 灰白色 (釉) 10Y7/2 灰白色	京都産
48	緑釉陶器	椀	東区	G・H-3	第2層	-	(2.3)	9.0	(胎) N 7/0 灰白色 (釉) 10Y7/2 灰白色	京都産
49	緑釉陶器	椀	東区	D-1・2	第2層	-	(2.1)	9.0	(胎) 2.5Y7/1 灰白色 (釉) 7.5Y6/3 オリーブ黄色	猿投産
50	瓦器	皿	東区	F-1・2	第2層	10.2	1.5	-	N 3/0 暗灰色	楠葉産
51	瓦質土器	盤	東区	F-1・2	第2層	39.8	(7.0)	-	N 3/0 暗灰色	楠葉産
52	白色土器	高杯	西区	A-2・3、 B3	第2層	-	(8.3)	-	2.5Y8/1 灰白色	
53	土師器	皿	東区	-	第2層直上	-	(1.3)	3.4	10YR8/2 灰白色	皿 D
54	瓦	軒丸瓦	西区	B-1・2	第2層直上	瓦当径 (15.0)	長 (3.4)	-	N 7/0 灰白色	複弁蓮華文
55	土師器	皿	東区	F-3	建物 1 (柱穴 083)	9.1	2.4	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
56	土師器	皿	東区	F-3	建物 1 (柱穴 083)	8.6	1.7	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
57	土師器	皿	東区	E-2	建物 1 (柱穴 090)	9.2	(2.8)	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	皿 N
58	土師器	皿	東区	F-3	建物 1 (柱穴 082)	13.0	(2.5)	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿 N
59	土師器	皿	東区	F-3	建物 1 (柱穴 083)	15.6	(2.5)	-	10YR8/2 灰白色	皿 N
60	白色土器	皿	東区	F-3	建物 1 (柱穴 083)	9.3	2.3	4.0	10YR8/3 浅黄橙色	
61	瓦	軒丸瓦	西区	D-2	建物 1 (柱穴 025)	瓦当径 (13.4)	長 (2.9)	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	単弁八弁蓮華文か
62	瓦	軒丸瓦	東区	E-2	建物 1 (柱穴 090)	瓦当径 (12.0)	長 (2.5)	-	(瓦当面) N 3/0 暗灰色 (側面・瓦当裏) 10YR8/3 浅黄橙色	単弁蓮華文
63	木製品	柱材	東区	G-2	建物 1 (柱穴 078)	長 17.0	幅 15.7	高 (39.8)	-	ヒノキ材
64	土師器	皿	東区	G-2・3	土坑 076	9.0	(2.6)	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	皿 N
65	土師器	皿	東区	G・H-3	土坑 076	9.2	2.7	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
66	土師器	皿	東区	G・H-3	土坑 076	12.8	2.7	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
67	土師器	皿	東区	G・H-3	土坑 076	14.6	2.6	-	7.5YR7/4 にぶい橙色	皿 N
68	須恵器	鉢	東区	G・H-3	土坑 076	28.8	(4.8)	-	N 5/0 灰色	東播系

掲載 No	器種	器形	調査区	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
69	瓦質土器	盤	東区	G・H-3	土坑 076	-	(6.1)	-	N 3/0 暗灰色	楠葉産
70	白色土器	皿	東区	G・H-3	土坑 076	-	(0.8)	4.0	10YR8/2 灰白色	
71	白色土器	皿	東区	G-2・3	土坑 076	-	(1.6)	4.0	10YR8/2 灰白色	
72	白磁	合子蓋	東区	G・H-3	土坑 076	8.4	(2.1)	-	(胎) N 8/0 灰白色 (釉) 2.5GY8/1 灰白色	景德鎮窯か
73	白磁	碗	東区	G・H-3	土坑 076	14.8	(4.1)	-	(胎) N 8/0 灰白色 (釉) 5Y7/2 灰白色	
74	土師器	皿	西区	B-3	礎盤石 017	12.6	(2.5)	-	10YR8/3 浅黄橙色	皿 N
75	土師器	皿	西区	B-3	礎盤石 017	13.8	(2.8)	-	10YR7/3 にぶい黄橙色	皿 N
76	瓦	軒平瓦	西区	A-1・2	地業 016	瓦当幅 (7.0)	瓦当厚 3.3	長 (6.4)	2.5Y8/2 灰白色	唐草文
77	瓦	軒平瓦	西区	A-1・2	地業 016	瓦当幅 (7.3)	瓦当厚 4.3	長 (6.9)	N 7/0 灰白色	唐草文
78	瓦	軒平瓦	西区	A-1・2	地業 016	瓦当幅 (6.4)	瓦当厚 3.7	長 (4.7)	N 3/0 暗灰色	右偏行唐草文
79	瓦	平瓦	西区	A-1・2	地業 016	長 (7.7)	幅 (8.5)	厚 (1.9)	2.5Y7/3 浅黄色	両面布目瓦
80	瓦	平瓦	西区	B-1・2	地業 016	長 (10.8)	幅 (8.0)	厚 2.2	2.5Y7/2 灰黄色	
81	瓦	熨斗瓦	西区	A・B- 1・2・3	地業 016	長 (13.9)	幅 (13.2)	厚 (2.4)	N 5/0 灰色	平瓦を縦に半截
82	瓦	丸瓦	西区	A・B-2	瓦列 018	長 (15.8)	幅 (14.3)	高 8.5	N 3/0 暗灰色	
83	瓦	軒平瓦	西区	B-2	瓦列 018	瓦当幅 (13.3)	瓦当厚 3.9	長 (5.7)	N 3/0 暗灰色	唐草文
84	土師器	皿	西区	B-2	第1層	10.4	(2.3)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	皿 N
85	土師器	皿	西区	B-3	第1層	12.6	(2.5)	-	10YR6/7 明黄褐色	皿 N
86	青磁	壺	西区	C-2	第1層	-	(3.6)	-	(胎) N 7/0 灰白色 (釉) 7.5GY7/1 明緑灰色	明代龍泉窯
87	青磁	承盤?	西区	C-2	第1層	-	(2.8)	7.2	(胎) N 7/0 灰白色 (釉) 10GY6/1 緑灰色	高麗青磁
88	施釉陶器	合子	西区	B-1	第1層	2.6	3.5	3.0	(胎) 2.5Y8/1 灰白色 (釉) 2.5Y7/2 灰黄色	古瀬戸
89	土製品	土人形	東区	G-2	第1層	高 (2.5)	幅 (2.3)	-	2.5Y8/1 灰白色	犬形
90	瓦	軒平瓦	西区	B-2	第1層	瓦当幅 (7.8)	瓦当厚 4.5	長 (6.4)	N 4/0 灰色	内行唐草文
91	瓦	軒平瓦	東区	D・E -1・2	第1層	瓦当幅 (8.4)	瓦当厚 4.3	長 (4.5)	N 3/0 暗灰色	右偏行唐草文
92	瓦	軒平瓦	東区	D・E -1・2	第1層	瓦当幅 (12.9)	瓦当厚 5.0	長 (6.3)	2.5Y7/2 灰黄色	左偏行唐草文
93	瓦	軒平瓦	西区	B-1	第1層	瓦当幅 (7.5)	-	長 (4.2)	10YR8/2 灰白色	左偏行唐草文
94	瓦	軒平瓦	西区	B-1	第1層	瓦当幅 (9.9)	瓦当厚 3.2	長 (11.3)	N 4/0 灰色 ～N 6/0 灰色	陰刻剣頭文
95	瓦	軒丸瓦	東区	H-3	第1層	瓦当径 (12.0)	-	長 (2.8)	N 3/0 暗灰色	右卷三巴文
96	瓦	軒丸瓦	東区	F-3	第1層	瓦当径 (17.0)	-	長 (3.0)	N 6/0 灰色	複弁八弁蓮華文 栗栖野瓦窯産
97	瓦	丸瓦	西区	B-2	第1層	長 (6.2)	幅 (5.4)	高 (2.8)	2.5Y7/1 灰白色	
98	瓦	平瓦	西区	A-2	第1層	長 (6.2)	幅 (6.3)	厚 (1.5)	10YR8/2 灰白色	両面布目瓦
99	瓦	平瓦	西区	B-1	第1層	長 (8.7)	幅 (5.6)	厚 (2.2)	N 2/0 黒色	
100	瓦	平瓦	西区	B-1	第1層	長 (7.7)	幅 (7.6)	厚 (1.9)	10YR8/3 浅黄橙色	
101	白磁	碗	東区	E・F-2	土坑 064	16.2	(4.8)	-	(胎) N 8/0 灰白色 (釉) 5Y7/2 灰白色	
102	白磁	碗	東区	E・F-2	土坑 064	-	(3.0)	5.3	(胎) 2.5Y8/1 灰白色 (釉) 2.5Y7/4 浅黄色	
103	瓦質土器	火鉢	東区	E・F-2	土坑 064	20.8	(5.6)	-	N 3/0 暗灰色 ～N 5/0 灰色	

図 版



1. 西区 第1面遺構掘削後（東から）



2. 西区 第1面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 東区 第1面遺構掘削後（東から）



2. 東区 第1面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 西区 第2面遺構検出後（東から）



2. 西区 第2面遺構検出後 垂直写真（上が北）



1. 西区 第2面遺構掘削後（東から）



2. 西区 第2面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 東区 第2面遺構掘削後（東から）



2. 東区 第2面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 西区 建物1 柱穴025 地下式礎石検出状況
(南から)



2. 東区 建物1 柱穴090 地下式礎石検出状況
(北から)



3. 東区 建物1 柱穴091 南北断面 (西から)



4. 東区 建物1 柱穴080 南北断面 (西から)



5. 東区 建物1 柱穴078 東西断面 (北から)



6. 東区 建物1 柱穴081 掘削後 (南から)



7. 東区 建物1 柱穴082 掘削後 (南から)



8. 東区 建物1 柱穴083 掘削後 (南から)



1. 西区 地業016・礎盤石017・瓦列018 検出状況（北から）



2. 西区 地業016・礎盤石017・瓦列018 検出状況（南から）



1. 西区 地業016 検出状況（西から）



2. 西区 瓦列018 検出状況（西から）



3. 西区 礎盤石017 検出状況（南から）



1. 西区 第3面遺構掘削後（東から）



2. 西区 第3面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 東区 第3面遺構検出後（東から）



2. 東区 第3面遺構検出後 垂直写真（上が北）



1. 東区 第3面遺構掘削後（東から）



2. 東区 第3面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 東区 地業100・瓦列101・石敷113 検出状況（北から）



2. 東区 柱列2・3、溝116 掘削後（南から）



1. 東区 柱列2 柱穴107 東西断面（南から）



2. 東区 柱列2 柱穴106 東西断面（南から）



3. 東区 柱列2 柱穴104 東西断面（南から）



4. 東区 柱列2 柱穴103 東西断面（南から）



5. 東区 柱列3 柱穴111 東西断面（南から）



6. 東区 柱列3 柱穴110 東西断面（南から）



7. 東区 柱列3 柱穴109 東西断面（南から）



8. 東区 溝116 南北断面（西から）



1. 西区 柱列1 掘削後（西から）



2. 西区 柱列1 柱穴043 東西断面（南から）



3. 西区 柱列1 柱穴044 東西断面（南から）



4. 西区 柱列1 柱穴045 東西断面（南から）



5. 西区 柱列1 柱穴046 東西断面（南から）



1. 西区 土坑030・037 掘削後（南から）



2. 西区 土坑037 東播系須恵器検出状況（南から）



3. 西区 土坑035 掘削後（南から）



1. 東区 第4面遺構掘削後（東から）



2. 東区 第4面遺構掘削後 垂直写真（上が北）



1. 東区 柱列4 掘削後 垂直写真（上が北）



2. 東区 井戸133・溝136 掘削後（北から）



3. 東区 柱列4 柱穴128 東西断面（南から）



4. 東区 柱列4 柱穴127 東西断面（南から）



5. 東区 柱列4 柱穴125 東西断面（南から）



6. 東区 溝136 東西断面（北から）



1. 東区 井戸133 曲物検出状況（西から）



2. 東区 井戸133 曲物内掘削後（西から）



3. 東区 井戸133 掘方南北断割後（西から）



1. 井戸133・溝136・柱穴149 出土遺物（土器・瓦）



2. 第3層・第3層直上 出土遺物（土器）



1. 石敷114 出土遺物 1 (土器)



2. 石敷114 出土遺物 2 (瓦)



3. 瓦列101 出土遺物 1 (瓦)



4. 瓦列101 出土遺物 2 (瓦)



1. 柱列2・3 出土遺物（土器・瓦）



2. 溝116 出土遺物（土器）



1. 土坑035 出土遺物（土器）



2. 土坑037 出土遺物（土器）



1. 第2層・第2層直上 出土遺物（土器・瓦）



2. 建物1 出土遺物（土器・瓦）



1. 土坑076 出土遺物（土器）



2. 地業016・瓦列018 出土遺物（瓦）



1. 第1層 出土遺物1 (土器・土製品・瓦)



2. 第1層 出土遺物2 (明代青磁 壺)



3. 第1層 出土遺物3 (高麗青磁 承盤)



4. 土坑064 出土遺物 (土器)

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょういちぼうよんちょうあとはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京左京四条一坊四町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編著者名	望月麻佑 興梠千春							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町8番地							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2025年11月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうしじょう 平安京左京四条 いちぼうよんちょうあとし 一坊四町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 みぶごしよのうちちょう 壬生御所ノ内町 29ばん3・4 29番3・4	26100	1	35度 00分 13.8秒	135度 44分 39.1秒	2025年 5月12日 ～ 2025年 7月4日	138.6 m ²	集合 住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安京跡	都城跡	平安時代末期 ～ 鎌倉時代初頭		建物、柱列、 瓦列、石敷、 地業、溝、 礎盤石、井戸、 土坑、柱穴		土師器、須恵器、 瓦器、瓦質土器、 白色土器、青磁、 白磁、施釉陶器、 輸入陶器、瓦、 石製品、木製品		平安時代末期から鎌倉時代初頭の間で3時期にわたる宅地改変が認められた。 1段階目では井戸や溝、柱穴群が認められた。2段階目では四条大路北築地内溝、地業、瓦列、石敷、柱列、土器埋納遺構などを検出した。3段階目では建物とそれに付随する溝、地業、瓦列、礎盤石などが確認された。 史料では当町は平安時代後期の公卿である源国信の邸宅地とされているが、その子孫である源顕信の邸宅と想定される。
		安土・桃山時代以降		素掘り溝群、 石列、土坑		土師器、瓦質土器、 青磁、施釉陶器、 土製品		

文化財サービス発掘調査報告書 第36集

平安京左京四条一坊四町跡 発掘調査報告書

発行日 2025年11月28日

株式会社 文化財サービス

編集 〒601-8127 京都市南区上鳥羽北花名町8番地
TEL 075-672-6800

三星商事印刷株式会社

印刷 〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
TEL 075-467-5151